

富山市水橋荒町遺跡発掘調査概要Ⅱ

1999年3月

富山市教育委員会
富山市埋蔵文化財調査委員会

富山市水橋荒町遺跡発掘調査概要Ⅱ

1999年3月

富山市教育委員会
富山市埋蔵文化財調査委員会



水橋荒町遺跡全景（平成 8 年度調査）

序

富山市は、富山県のほぼ中央に位置し、東の立山連峰を望み、北は日本海、西には呉羽山丘陵を擁する風光明媚な土地であります。恵まれた大自然の中、多くの先人が残した貴重な文化財は、郷土富山の歴史を知るためのかけがいのない遺産であります。これを保護し、未来へ継承してゆくことは、現代の私たちが果たすべき責務と云えます。

現在、富山市内には約600か所にもわたる遺跡が確認されています。近年、市の北部地区では各種開発に伴って数多くの遺跡発掘が行なわれ、先人たちが歩んだ歴史の一端が明らかになってきました。

特に水橋地区におきましては、平安時代の文献に水橋駅が所在した事が記されるなど、古代の交通の要衝として注目すべき地域であります。

水橋荒町遺跡では、水橋浄化センターの第1期工事に伴い、平成3年度から平成5年度まで発掘調査を行っております。奈良～平安時代の大型建物跡や井戸が数多く発見されており、役所的な施設があったと推定されるなど、重要な成果があげられました。

このたび、第2期工事に先立ち、先の調査区域の北側にあたる部分を発掘調査いたしました。調査の結果、奈良～平安時代を中心とした集落跡の北限が確認され、遺跡の性格を明らかにする上で大きな成果を得ることができました。

このような調査成果をまとめた本書が、私たちの財産である埋蔵文化財を理解していく上で、少しでも参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました地元水橋辻ヶ堂地区の方々をはじめ、各関係機関の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月

富山市教育委員会

教育長 大島哲夫

例　言

1. 本書は、水橋浄化センター建設に伴う水橋荒町遺跡の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 本書は、同遺跡内で実施した平成3～5年度調査概要報告をIとし、今回の概要報告をIIとした。
3. 発掘調査は、富山市教育委員会が調査主体となり、山武考古学研究所の調査協力を得る事が出来た。

本遺跡の所在地・調査面積・調査期間ならびに担当調査員は次のとおりである。

所 在 地：富山県富山市水橋辻ヶ堂地内

調査面積：1,954m²

調査期間：平成8年度調査：平成8年11月11日～平成9年3月28日

平成9年度調査：平成9年4月3日～平成9年7月25日

調査担当：小林高範（富山市教育委員会生涯学習課文化係学芸員）

調 査 員：小村正之（山武考古学研究所調査研究員）

4. 整理調査は、小村と松田で行ない、伊藤順子・藤曲ひろ子・佐藤洋子・浅賀都子の協力を得た。
5. 本書の執筆分担は、次のとおりである。

第1章 小村正之

第2章 1. 小林高範 2. 小村

第3・5章 小村・松田政基

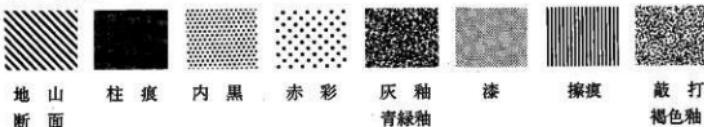
第4章 パリノ・サーヴェイ

6. 発掘調査にあたり、次の諸機関から協力を得ることが出来た。記して感謝の意を表します。
富山市水橋浄化センター・日本テクニカルセンター・開成測量・丸三開発工機・花崎工業
・パリノ・サーヴェイ・釜石文化財保存処理センター
7. 本遺跡の出土遺物・写真・図面などの資料は、富山市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査にあたり、調査に参加された方々は次のとおりである。

浅井辰雄・相川重夫・相川峰子・飯田辰男・魚住弥三松・尾崎一男・押田百合子・春田ひとみ
久保田朝子・菅田義一・菅田輝子・菅田ハルエ・菅田宗憲・高橋民夫・竹内富子・堂口陽子・
長井初枝・中西真優美・新鞍キミエ・西野昌子・林ミツイ・前田朝江・前田コト・宮城桂子・
矢沢澄子・山本勇介・横越文子・吉田史子

凡　例

1. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行1/50,000『魚津』、富山市基本図1/2,500、遺構配置図は1/200である。
2. 遺構の縮尺は、掘立柱建物跡が1/80、井戸跡が1/80、溝跡が1/80。遺物の縮尺は、土器は基本的に1/4とし、斎串は1/2とした。また井戸枠の部材は1/4とした。
3. 全体図中の方向は磁北を表す。また座標のXY数値は、平成3年時調査で設定した任意のグリッド杭を基準として引き継ぎ使用した。したがってXYの数値は公共座標数値ではない。
4. 本書に使用したスクリーントーンは、次の通りである。





第1図 水橋荒町遺跡位置図(国土地理院発行「魚津」1/50,000)



第2図 調査区位置図 (1/5,000)

本文目次

巻首写真			
序			
例言・凡例			
第1章 遺跡の位置と環境	1	3. 調査の経過.....	4
1. 遺跡の位置.....	1	4. 基本層序.....	5
2. 歴史的環境.....	1	第3章 調査の成果.....	6
第2章 調査の経緯と経過	3	1. 遺跡の概要.....	6
1. 調査に至るまで.....	3	2. 遺構.....	8
2. 調査の方法.....	4	3. 遺物.....	17
		第4章 自然科学分析.....	42
		第5章 まとめ.....	44

挿図図版目次

第1図 水橋荒町遺跡位置図.....	序
第2図 調査区位置図.....	序
第3図 周辺の遺跡図.....	2
第4図 平成8年度調査区範囲図.....	3
第5図 基本堆積土層模式図.....	6
第6図 遺構配置図.....	7
第7図 遺構略図.....	9
第8図 井戸枠横板の組み方.....	10
第9図 SD 01~03 土層図.....	11
第10図 遺構略図.....	12
第11図 SB 01・02 実測図.....	13
第12図 SB 03・04 実測図.....	14
第13図 SB 05・06 実測図.....	15
第14図 SA 01・02、SE 01~03 実測図.....	16
第15図 SE 01・04、SB 04 遺物実測図.....	17
第16図 SD 01~03 遺物実測図.....	18
第17図 SD 03・ピット・包含層遺物実測図.....	20
第18図 包含層遺物実測図.....	22
第19図 西側排土置き場遺物実測図.....	24
第20図 西側排土置き場・表採遺物実測図.....	27
第21図 縦板組隔柱横桟どめ構造の井戸枠各部材.....	32
第22図 縦板組隔柱横桟どめ構造の井戸枠縦板実測図（1）.....	33
第23図 縦板組隔柱横桟どめ構造の井戸枠縦板実測図（2）.....	34
第24図 縦板組隔柱横桟どめ構造の井戸枠隔柱実測図.....	35
第25図 縦板組隔柱横桟どめ構造の井戸枠横桟実測図.....	36
第26図 縦板井籠組み構造の井戸枠各部材.....	38

第27図	横板井籠組み構造の井戸枠横板実測図（1）	39
第28図	横板井籠組み構造の井戸枠横板実測図（2）	40
第29図	横板井籠組み構造の井戸枠横板実測図（3）	41
第30図	建物跡と遺跡の企画性	45
第31図	包含層の遺物分布図	47
第32図	水橋荒町遺跡遺構略図（平成3～5・8年度）	51

表 目 次

表1	SE01井戸枠部材規模表	37
表2	SE03井戸枠部材規模表	42
表3	掘立柱建物跡規模表	45
表4	遺構からの出土遺物組成	46
表5	漆付着土器の器種別固体数	48
表6	土錐計測表	49

写真図版目次

図版 1

1. 水橋荒町遺跡遠景（東より）上方は常願寺川と富山湾
2. 調査区全景（空撮：北より）

図版 2

1. 東調査区全景（空撮）
2. 西調査区掘立柱建物群（南西より）

図版 3

1. SE01井戸枠状況（南より）
2. SE02完掘状況（南より）

図版 4

1. SE03井戸枠（1段）状況（南より）
2. SE04完掘状況（東より）

図版 5

SE01・04出土遺物

図版 6

SE01出土遺物

図版 7

SE03・SD01～03出土遺物

図版 8

包含層・ピット・排土置き場出土遺物

図版 9

表採遺物、漆継ぎ・漆パレット

第1章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

水橋荒町遺跡（市遺跡番号44）は、富山市の北東部、常願寺川右岸に所在する。本遺跡の西側は急流で名高い常願寺川が北流し、北西約1kmの地点で富山湾に注ぎ込む。東側は白岩川が流れている。本遺跡は、この両河川に挟まれた扇状地先端部の北側、常願寺川右岸に位置する。ただし、現在の常願寺川河口付近の流路は、治水目的のため分水が行われており、本来は遺跡の東側の白岩川に近い所であったと思われる。地形的には、常願寺川水系の小河川によって形成されたと考えられる微高地になる。標高は現況で約2m、遺構確認面はそれよりも1m以下上がる。また発掘調査で検出された遺構は、井戸跡などの深い所で0m以下となる。周辺には湧水地帯があり、その良質で豊かな水を利用した水田が広がり、また江戸時代からの伝統を引く製薬業も行われている。河川を利用した水運も発達していた。

2. 歴史的環境

本遺跡周辺は、縄文時代早期から近現代に至るまで人々の足跡が多く残されている。しかし、その多くは散布地として周知されているものの、実際に発掘調査が行われていない場合がほとんどで、その全貌を知るには遠く及ばない。言い方を変えれば、多くの遺跡がほぼ手つかずのまま保存されているものと考えられる。

縄文時代は、本遺跡よりも南側、すなわち河川のより上流の微高地形や河岸段丘面及び丘陵に多く分布する。低地では、水橋荒町遺跡平成3～5年度発掘調査において、縄文時代中期後葉の土器が出士しているが、遺構が伴わず、遺物の出土量も少ないとから、大規模な集落が営まれていたとは考えられない。

弥生時代は縄文時代と同様、微高地形や河岸段丘面及び丘陵に多く分布する。低地には、本遺跡をはじめ、遺物の散布が見られる所があるが、遺構の発見は極めて少ない。時期的には後期から古墳時代前期にかけて存続するようである。遺跡としては清水堂B・清水堂E遺跡などである。

古墳時代は、白岩川流域を中心に古墳群が形成される。特に富山県内では希少な平野部の古墳群である、所謂「白岩川流域古墳群」が存在する。同古墳群は、白岩川上流部の丘陵尾根上にある上市町柿沢古墳群、中下流域の平野部には、直径46m、葺石・周濠・周庭帯を持つ立山町の稚兒塚古墳、舟橋村には前方後円墳である竹内天神堂古墳、円墳の塙越古墳、富山市に入り、清水堂・宮塚・若王子塚の各古墳が点在する。なお清水堂古墳は、平成7年度の試掘調査で周濠を有する直径約30mの円墳であることが確認されている。集落は、前期まではその存在が窺えるが、中期以降は今のところ発見されていない。

奈良・平安時代に入ると、遺跡数が増加し、本遺跡周辺はにわかに活況を呈することになる。本遺跡をはじめ、水橋畠等・同池田館などの各遺跡ではその主体をなす。また付近には、「延喜式」兵部省に見える越中国八駅のひとつである「水橋駅」が推定されている。

中・近世は、小出城・仏生寺城などの城館跡が築かれ、池田館・的場・馬場・専光寺・清水堂などの地名が残っている。また立山町を中心とした山地縁辺部には越中瀬戸焼の生産が行われ、その流通・消費が周辺遺跡で想定される。



第3図 周辺の遺跡図 (1/20,000)

- | | | |
|----------------------------|----------------------|-----------------------|
| 1. 水橋荒町：奈良・平安時代 | 7. 橫越：奈良・平安時代～近世 | 15. 浜黒崎原跡：縄文時代～中世 |
| 1-1. 水橋荒町平成3～8年度調査：奈良・平安時代 | 8. 水橋島等：弥生・古墳時代 | 16. 高島島跡：縄文～奈良・平安時代 |
| 2. 野田・平橋：縄文時代～中世 | 9. 水橋伊勢原A：奈良・平安時代 | 17. 鈴原中町I：奈良・平安時代～中世 |
| 3. 平橋亀田：古墳～奈良・平安時代 | 10. 水橋池田跡：古墳時代～中世 | 18. 水橋伊勢屋A：奈良・平安時代～中世 |
| 4. 野中新長崎：縄文～奈良・平安時代 | 11. 水橋の場：奈良・平安時代～中世 | 19. 水橋中村：奈良・平安時代 |
| 5. 野田II：縄文時代～近世 | 12. 浜黒崎町跡：奈良・平安時代 | 20. 宮城：奈良・平安時代～中世 |
| 6. 高来：奈良・平安時代 | 13. 浜黒崎原跡：奈良・平安時代～近世 | |
| | 14. 宮条南：縄文時代～近世 | |

第2章 調査の経緯と経過

1. 調査に至るまで

水橋荒町遺跡は、富山市教育委員会が昭和63年に行った市内分布調査によって発見された。遺跡の推定範囲は約55haと広大であり、縄文時代から近世にわたる複合した遺跡である。

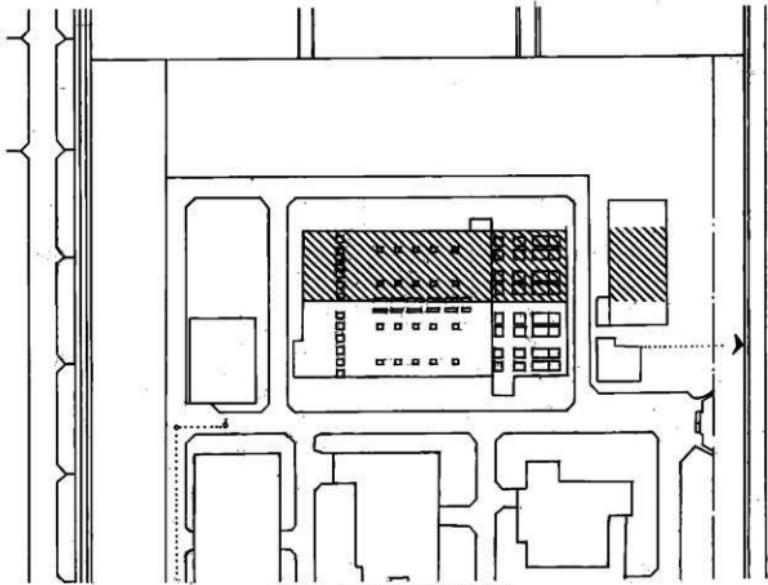
平成元年8月、遺跡西側の常願寺川右岸堤防沿いに、公共下水道水橋浄化センターの建設計画が公表された。計画区域は約35,000m²あり、その後、市下水道建設課と協議を進め、試掘調査を行った。

試掘調査は、河川保全区域を除いた約30,000m²を対象とし、平成3年5月～6月にかけて行った。

その結果、ほぼ全域に遺跡が確認され、良好に遺構・遺物が遺存することが明らかとなった。遺構には掘立柱建物の柱穴・土坑・溝が多数あり、縄文時代後期から近世にわたる土器・石器のほか、黒色粘板岩の石帶（丸堀）や平瓦が出土した。いずれも奈良・平安時代を主体とする。

その後、工事計画と合わせて調整を重ね、第1期工事にかかる発掘調査を引き続き行うこととなった。発掘調査は、平成3年に4,800m²、平成4年に5,600m²、平成5年に1,900m²と3カ年をかけて富山市教育委員会が実施した。奈良～平安時代を主体とする大型掘立柱建物、井戸が多数みられ、官衙的な性格をもつものとして位置付けられた。

平成7年、浄化センターの第2期工事計画が市下水道建設課から出されたため、対応を協議し、建物増築分1,900m²の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、富山市教育委員会が設置した富山市埋蔵文化財調査委員会が受託し、山武考古学研究所（所長 平岡和夫）の協力を得ながら、平成8年11月11日～平成9年7月25日まで実施した。



第4図 平成8年度調査区範囲図

2. 調査の方法

表土（厚さ70~100cm）除去は、パワーショベル2台を用いて遺物包含層（第Ⅱ層）上面まで行った。その後遺物包含層（厚さ40~60cm）は、出土した遺物を残して、スコップとジョレンを用いて掘り下げ、残土はベルトコンベアを用いて調査区外に排出した。

次に、ジョレン掛けによる遺構確認作業を行った。遺構の掘り下げは、移植ゴテの使用を基本として、その状況に応じて一部スコップとジョレンを使用した。遺構は土層断面観察用にベルトもしくは半截して掘り下げ、土層観察後に完掘した。ただし構造物として復元できない小ピットは最初から完掘し、掘立柱建物跡の掘り形あるいは、柱穴と考えられるピットについては、ピット全体を少しづつ掘り下げて柱痕を検出した後、半截して土層の断面観察を行った。

記録は、図化と写真によって行った。図化は、磁北を主軸にして、平成3年~5年に実施した調査時の任意グリッドを用いた。

作成した図面は、100分の1全体遺構確認図、20分の1遺構土層断面図、同遺構平面図、10分の1遺構詳細図、20分の1遺構完掘断面図、100分の1全体図である。このうち平面図はトータルステーションを用い、100分の1全体図はトータルステーションからパソコンとCADによる図化を行った。

写真は、35mmモノクロ・同カラーネガ・6×7モノクロ・同カラーネガを用いて、遺構断面・遺物出土状況・遺構完掘状況など適宜撮影した。また、遺跡の全体写真はラジコンヘリコプターを用いて、垂直及び各方向からの俯瞰撮影を行った。

3. 調査の経過

発掘調査は、平成8年度が平成8年11月11日~平成9年3月28日、平成9年度が平成9年4月3日~同年7月25日までである。

平成8年度

11月期

11日、調査開始、西側調査区の重機による表土除去及び残土処理作業を行う（～19日）。14日、プレハブを搬入、組み立てる。15日、機材とトイレの搬入及びプレハブ内の配線を行う。19日、作業員が着任する。ベルトコンベアの搬入及び水中ポンプによる調査区内的排水を行う。20日、ベルトコンベアを調査区内に設置、調査区脇に排水用の側溝を掘削する。21日、西側調査区東端部より人力による遺物包含層の除去作業を開始する。

12月期

10日、富山市教委と打ち合わせを行ない。①年内の調査は26日までとする事。②冬期の休止期間は12月27日~3月中旬予定。③調査区南側が崩壊しやすい状態であるため矢板が必要である。以上の点を確認する。13日、矢板設置を見積るため業者（共和クレーン）が来跡する。26日、ベルトコンベアの撤収、大掃除及び調査区南側に矢板を打ち込んで、本年の調査を中断する。



ラジコンヘリによる空撮状況

平成9年（平成8年度）3月期

25日、調査再開、ベルトコンベアを搬入、重機による排水用側溝の掘削を行う。27日、西側調査区西端部より包含層除去作業を開始する。28日、平成8年度の調査を終了する。

平成9年度

4月期

3日、平成9年度の調査を開始する。24日、包含層除去後、北西部から適宜遺構確認作業を行う。

5月期

1日、包含層除去作業。13日、今日までの遺構は掘立柱建物跡3棟、土坑5基、溝跡3条、ピット184基を確認する。19日、概略図（1/100）を作成しながら遺物の取り上げを行なう。30日、SD02・03の掘り下げを開始する。SD03は深く平安時代の須恵器の混入が見られ、特にSD02との合流地点付近に多い傾向が窺える。本日まで遺構は土坑8基、ピット222基を確認する。

6月期

2日、包含層より須恵器短頸壺（口縁一肩の一部破損）出土。3日、東側調査区の表土排土を重機で開始する。9日、SK06は井戸跡と判明しSE01とする。また井戸枠の出土により隅柱縦板横残石と思われる。23日、西側地区包含層除去作業を終了する。27日、西側地区的遺構調査を開始する。3日、重機による東側調査区の表土除去作業及び残土処理作業を行う（～5日）。



調査区南側の矢板設置状況

7月期

23日、西側地区的全体清掃作業を行う（～26日）。27日、西側地区的空中写真撮影を行う。東側地区の包含層除去作業を開始する。8日、西側地区的遺構調査を終了する。11日、東側地区の包含層除去作業を終了、同地区的遺構確認作業を開始する。15日、遺構確認作業を終了、遺構調査を開始す。22日、東側地区的全体清掃を行う（～23日）。24日、東側地区的空中写真撮影を行う。25日、東側地区的遺構調査を終了し、本遺跡の発掘調査の全工程を終了する。

4. 基本層序

今回の調査区では、西側と東側で大きく土層の堆積状況が異なることを特徴としている。

第Ⅰ層（表土層）

東西両区とも現在は水田耕作土を主体として、一部第1期工事の際の排土などが混入している。厚さは70cm～1mである。

第Ⅱ層（遺物包含層）

厚さ40～60cmの黒褐色土を主体とした遺物包含層がある。奈良～平安時代における遺構の掘り込み面は、この層にあると考えられるが、肉眼では観察できない状況である。そのため遺構確認面はその直下の第Ⅲ層まで掘り下げるに至った。

第Ⅲ層

第Ⅲ層は調査区の東・西側では層位が異なる。西側では明黄褐色の砂層（第Ⅲa層）、東側は黄褐色の粘質土（第Ⅲb層）となる。遺構確認面は第Ⅲaもしくはb層の上面、柱穴などの底面はこの層

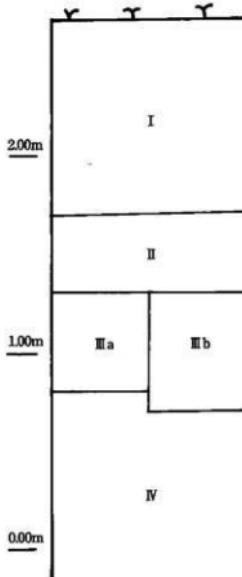
の下部にある。また第Ⅲ b層は極めて水はけが悪く、水に浸かっている時はドロドロの状態であるが、乾燥すると今度はガチガチに固くなり、遺構検出作業が極めて困難となった。

第Ⅳ層（地山）

青灰色の粗い砂層である。また掘り下げるときが多くしみ出してくるため、遺構の壁が崩れやすく、特に井戸跡の調査には困難を来たした経緯がある。

この層の上面は、東側では標高1.00mにあるが、西へ行くに従いわずかに低く、標高0.90mとなっている。また井戸の掘り形底部はこの層を越え標高0.00m この層が有水帯となる。

富山平野での井戸跡は、西方約20Km離れた小杉町針原東遺跡で弥生時代後期終末～古墳時代初頭の削り貫いた井戸を初めとし、中世に至る井戸が検出されている。それらの井戸はいずれも掘り形が青灰色砂層（標高0.00m）まで達しており、有水層が当遺跡と同様の青灰色砂層である事がわかる。



第5図 基本堆積土層模式図

第3章 調査の成果

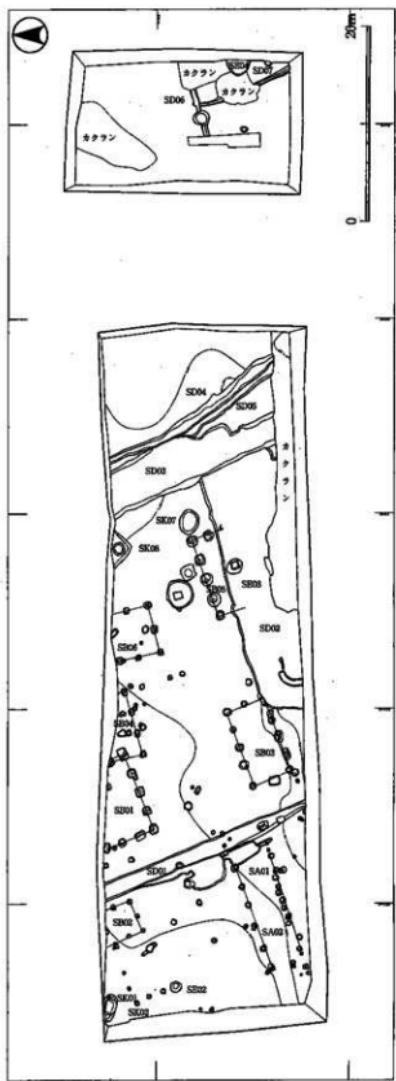
1. 遺跡の概要

立山連峰を源とする大小の河川は、富山平野において扇状地を形成し、水橋荒町遺跡は常願寺川の右岸、その扇状地形の先端に位置する。遺跡から日本海までは約700mの距離である。

また、遺跡の主体となる律令期の遺構は、掘立柱建物跡・溝状遺構など企画性の高いものがあり、先の平成3～5年の調査成果と合わせて、官衙との関連も視野に入れた今後の調査体制が必要である。水橋地区は從来から古代における水橋駅に比定されているものの、残念ながら今回の調査では、直接それを指す遺構・遺物は出土していない。

本遺跡で検出された遺構は、掘立柱建物跡（SB）6棟（いずれも西側調査区）、溝跡（SD）7条（西側調査区5条、東側調査区2条）、井戸跡（SE）4基（西側調査区3基、東側調査区1基）、横列（SA）2条、竪穴状遺構（土坑:SK）4基（いずれも西側調査区）、ピット状遺構多数である。

出土した遺物は、縄文時代～近世におよび、古くは縄文土器・石斧、土師器、須恵器、また輸入陶磁器、珠洲焼き、瀬戸美濃、近世陶磁器（肥前系・越中瀬戸）、など時代に大きな幅のある複合遺跡で、主体となる遺物は、奈良・平安時代である。遺物は大型整理箱にして5箱、木製品が250tの水槽にして2個分である。木製品は大半が井戸の枠材であり、組み方は隅柱縦板組み横棧留めと横板井籠組みの2種類である。他に柱根と井戸跡から出土した資串が見られる。



第6図 造構配置図

2. 遺構

掘立柱建物跡

西側調査区の中央部西寄りで6棟検出された。いずれも側柱式の掘立柱を採用し、調査区内には総柱式の建物跡は検出されていない。各建物の平行方向は磁北を基準として東西棟の方向N-65°-74°-E、あるいは南北棟の方向N-27°-Wに納まる建物が多く、多少のズレはあるものの企画性は認められる。掘り形の形態は略方形が多く、楕円形は少ない。柱痕は30cm規模である。また、遺構の検出面を第3層としたために掘り形の深さはわずかとなり、そのため柱痕の観察が困難となった。

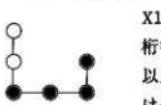
掘立柱建物跡の模式図記号 ●：柱根とどめる掘り形 ◉：柱痕とどめる掘り形 ○：抜き取り痕あり ◇：柱痕がない掘り形 (方位はすべて上が北、大きさは認意である)

SB-01 (第7・11図)

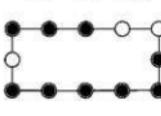
X100, Y60, SD01の東側、SB03の北側に位置しSD01と並行する。

桁行4間(2.10m, 7尺等間)、梁間3間(1.80m・1.60m・1.80m: 6尺: 5.33尺: 6尺)、総長は桁行8.40m、梁行の5.20mの東西棟側柱式建物である。平行方向はN-68°-Eである。掘り形は一辺1m前後の略方形を呈し、最も方形に近く規模も最大であるが深さは18~24cmである。確認された柱痕は径約30~40cmである。重複関係は柱痕の位置によりP132(SB04)よりP131(SB01)を古いとした。したがってSB04が新しい。方向性を同じくする他の遺構はSD01・SD05、SB02・SB03・SB05・SA01である。特にSB03の東・西妻側とは柱筋が通る事から同時期と見てよい。遺物の出土はない。

SB-02 (第7・11図)

X120, Y60, SD01の西側に位置し、近接して並行する。

桁行2間以上(1.65m・5.5尺)、梁間2間(1.65m・5.5尺等間)、総長は桁行(3.30m以上)、梁行3.30mの南北棟側柱式建物である。建物の方向はN-27°-W、掘り形は一辺40~60cm前後の楕円形を呈し、柱痕は20~24cmである。建物・掘り形は規模的に今回のなかで最小である。重複関係はない。方向性を同じくする他の遺構はSD01・SD05、SB01・SB03・SB05である。遺物の出土はない。

SB-03 (第7・12図)

X100, Y40, SB01の南側、SB05の西側に位置し、SD01と並行する。

側柱南列の建て替えによりSB03A(旧)とSB03B(新)に分けられる。
SB03A(旧)は桁行4間(2.10m, 7尺等間)、梁間2間(2.10m, 7尺等間)、総長は桁行(8.40m)、梁行(4.20m)の東西棟側柱式建物である。建物の方向はN-68°-E、掘り形は一辺0.80m前後の楕円形を呈し、柱痕は径20cm前後、深さ20cm前後である。

SB03B(新)は側柱南列P171・P175・P176・P177・P179の建て替えによりSB03Bとした。これらの掘り形は長楕円形を呈するが、具体的には一辺0.80m前後の円形あるいは楕円形の掘り形が2つづつ重なった状況であった。柱痕はすべてその西寄りに検出されているところから側柱の取り替えと判断した。SB03Bの柱痕は側柱南列のみ西側に20~50cm移動しており、建物は平行四辺形となる。重複関係はSD02が新しい。また方向性を同じくする他の遺構はSD01・SD05、SB01・SB03・SB05で、特にSB01の妻側とは柱筋が通る事から同時期と見られる。遺物の出土はない。

SB-04 (第7・12図)

X100,Y60、SB01・SB06間に位置し、かつSB01と重複する。
桁行3間(2.25m, 7.5尺等間)、梁間2間以上(2.10m, 1.50m以上)、総長は桁行6.75m 梁行の3.60m以上の東西棟側柱式建物である。建物の方向はN-74°-E、掘り形は一辺0.70m前後の略方形を呈し、柱痕は径約20~30cmである。重複はSB01が古い。また間接的ではあるがSB06とは近接し過ぎるところから新旧が考えられる。遺物は南桁側から須恵器壙B・蓋(第15図、SB04 1・2)が出土している。

SB-05 (第7・13図)

X80,Y50、SB03の東側、SB06の南側に位置する。
桁行4間(2.10m, 7尺等間)、梁間2間以上(1.80m, 6尺等間)、総長は桁行8.40m、梁行3.60m以上の東西棟側柱式建物である。建物の方向はN-68°-E、掘り形は一辺1m前後の略方形を呈し、柱痕(P192)は径約30~40cmである。重複関係はSD02が新しい。またSB03と棟方向は同じであるが、柱筋はSB05が北側にややずれる。重複関係は直接的にはSE03が新しく、間接的にはSE01と近接しSE01の位置からSB06が新しいなど間接的に新旧が考えられる。遺物の出土はない。

SB-06 (第7・13図)

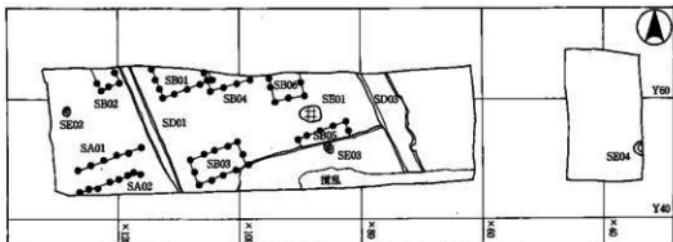
X90,Y60、SB05の北側、SB04の東側に位置する。
桁行2間以上(2.40m・2.10m以上)、梁間2間(2.40m, 8尺等間)、総長は桁行4.50m以上、梁行4.80mの南北棟側柱式建物である。建物の方向はN-14°-W、掘り形は一辺0.80m前後の略方形を呈し、柱痕は約20~30cmである。重複関係は直接ないが、SE01と近接するなど間接的に新旧が考えられる。遺物の出土はない。

柵列

西側調査区の南西端SD01の西側に柱穴の並びが見られる。柱穴の並びは規則的な間隔があり、SB01・SB03の棟方向と同じであるところから建物跡として、調査時には漠然と認識していたが、実際には北側列(SA01)に対して南側列(SA02)には対応するものがなく、建物としてではなく柵列としておいた。

SA-01 (第7・14図)

X110,Y50、SB03・SD01の西側に位置する。柱穴列は6個検出され、西側は調査区外となるが、その間は4.00mの距離がある事からそれが



第7図 遺構略図(約1/800)

西に延びる可能性はない。平面形態は略方形・梢円形と様々で、径は50cm前後である。柱穴列の方向はN-68°-EでSB01・03・04・05と同方向にある。柱間は西から2.00m・1.50m・2.10m・2.00m・2.00mである。柱穴の遺存は浅くいずれも10cm前後である。

S A - 0 2 (第7・14図)

X110,Y50、SB03・SD01の西側、SA01の南側に位置する。柱穴は14個検出されているが、数個を除きほぼ直線上に並ぶ。その方向はSA01と同様のN-68°-Eであるが、SA01の柱穴と対応する柱穴がない事からSA02とした。柱穴の遺存は浅くいずれも10cm前後である。

井戸跡

S E - 0 1 (第7・14図)

X80,Y50で検出された、内法一辺~0.70mの縦板組隔柱横棧どめ方形井戸である。井戸枠は井戸底部から1mの高さで遺存している。井戸枠は四方に隅柱を立て、横棧は厚さ2cmの板材をわたすが、ほぞ組などの細工は見られない。縦板は下部を矢板状に尖らせて打ち込み、隅柱は内側を横棧1段で支え井戸底に接した状況で検出された。縦板は幅18.5~10.2cm、厚さ2.80~1.40cmの杉材を使用し、縦板を交互に重ね合わせて目張り状とする。また使用された板材は孔が開いたもの、あるいは切込みが入ったものなど他の部材から転用されたものが見られる。

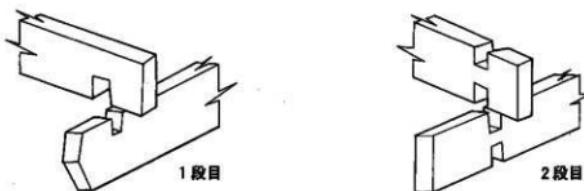
掘り形は円形を呈し、直径3.40m、深さ1.60mである。縦板の大半は上部で腐食により失っており、遺存するもので最大長1mである。これは遺構検出面からわずかに20cm下であり、現況の表土面を当時の生活面とすると縦板は少なくとも2m以上はあったものと思われる。内部からの遺物は土師器刷毛目甕片・円碟・煮串が出土している。

S E - 0 2 (第7・14図)

X130,Y50で検出された、素掘りの井戸と思われる。掘り形は梢円形を呈し、直径1.05m、深さ1.00mである。掘り形は幅狭く組版を探用する程の規模はない。

S E - 0 3 (第7・14図)

X80,Y50で検出された、内法一辺0.55~0.60mの横板井籠組み方形井戸である。井戸枠は横板に1ないし2方向から切れ込みを入れた下段4枚、中段4枚、上段2枚の3段からなる(第8図参照)。下段の板は東西側が長さ0.97.3~101.4cm、幅18.0~19.3cm、厚さ3.0cm、南北側はやや短く長さ76.0~76.4cm、幅19.4~20.1cm、厚さ3.5~2.2cmの杉材を使用している。下段の切れ込みは東西側が上方、南北側は下方に入れている。中段は東西側が上下から、南北側は下方のみ、上段は東西側の



第8図 井戸枠横板の組み方

み遺存し上下方向から南北側は欠落している。現況の表土面を当時の生活面とすると横板組みは少なくとも8段以上になろう。SE03はSD02より古く、SB05とはわからない。

SE-04 (第7・14図)

X30, Y50で検出された、井戸である。掘り形は円形を呈し、直径2.60m、深さ1.60mである。掘り形の規模からすれば十分に組板構造も可能と思われたが検出されていない。また、東半分は調査区外で完掘に至っていない。遺物は珠洲焼窯跡片が出土している。

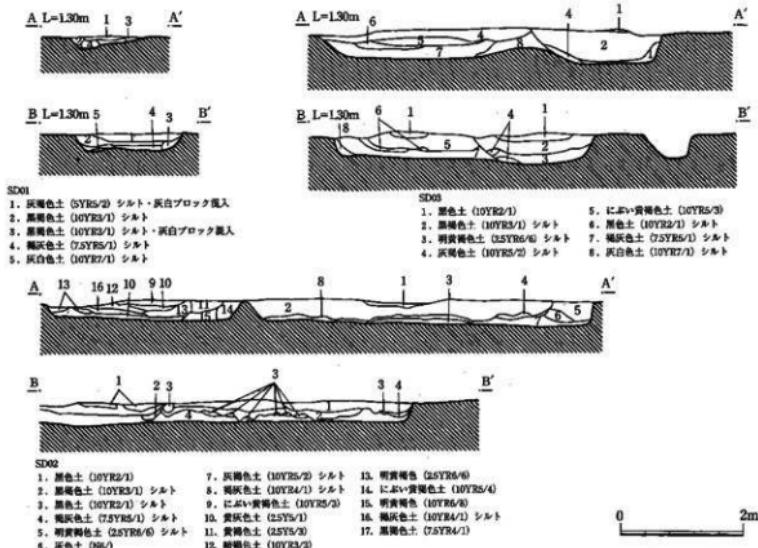
溝跡

SD-01 (第10・16図)

X100, Y40-X110, Y60で検出された、溝跡である。方向は溝幅を中心とするとN-22°-Wで、幅は南端と北端とでは異なり、南端は0.70m、北端は1.80m、深さは南端が13cm、北端が30cmである。溝は南端から北端に4cm低くなっている。断面は基本的に逆台形を呈すが南端では西寄りに深くなり、北端でもこの傾向は残すようである。方向から見るとSB01-03-05と同方向となり、同時期での可能性が高い。遺物は須恵器環B(1)・蓋(2)、土師器刷毛目壺(3-4)、打製石斧(5)・磨製石斧(6)などが出土し、石器を除きおおむね平安時代前半の様相が濃い。

SD-02 (第10・16図)

X100, Y40-X70, Y50で検出された、溝跡である。X100で北上しX100, Y49で北東方向に屈折し、X75, Y56でSD03と交差する。幅は南端部-屈折部までは幅2.50mとなるが、そこから他の遺構と重複し、浅いために平面形が捉えにくくなっている。土層 SD02A-A'には北側の壁から2.50mの位置



第9図 SD01~03土層図

に立ち上がりが観察され、擾乱部との間に新たな遺構が存在することが分かるが、浅いため新旧は分からなかった。さらにこのSD02の立ち上がり東延長線上には、SD03の東壁に湾曲した掘り込みが残る。この南端部と先程の立ち上がりはほぼ一直線上にあることから同一遺構と見なされる。重複関係はSB05・SE03が古く、SD03とは分からぬ。遺物は須恵器壺A(1)・蓋(2~5)・平瓶(13)・横瓶(14)・壺(10~12)が、土師器刷毛目壺(6~7)、繩の羽口片(15)が出土している。7は漆が付着する。

SD-03 (第10・16図)

X60,Y48~X80,Y55で検出された、溝跡である。調査時にはSD03と東側の新しい溝SD04・05が重複して検出されている。SD03の方位はSD01と同じくN-22°-Wで、幅は南端が3.10m・深さ0.36m、北端が4.00m(SD04と重複)・深さ0.30mである。遺物は須恵器壺A(1~4)・壺B(5~6)・蓋(7~8)・長頸瓶(13)・壺(11~12)、土師器刷毛目壺(9~10)、繩の羽口片(14~15)が出土している。また4・9・13には漆が付着しており、4・9は漆のパレット用に、13は接着剤としての使用法が窺われる。遺構の方向性からはSB01・03・SD01と同時期と見られる。また調査時にはSD01・02より覆土中の遺物から新しいとされていたが、遺物からは奈良時代後半が主体的で、平安時代以降の遺物は皆無である。

SD-04 (第6・10図)

SD03の東側に位置するX63,Y48~X74,Y56で検出された、溝跡である。SD04の方向は直線的ではなく、緩やかに弧状を描いて東に曲がる様相を呈し、N-35°~25°-Wに弧状となる。溝幅は0.80~1.50m・深さ0.50~0.70m、南端と北端との差は北端が11cm低い。SD03・SD05との重複関係はわからぬ。遺物の出土はない。

SD-05 (第6・10図)

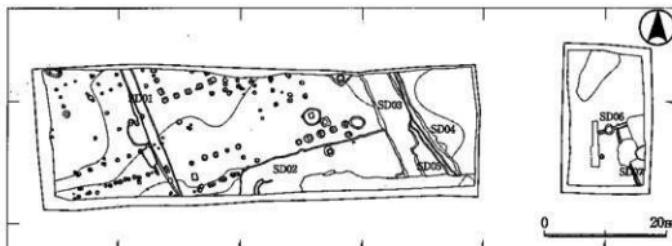
SD04と重複するX65,Y49~X75,Y56で検出された、溝跡である。方向はN-35°-W、溝幅は0.80m・深さ0.36~0.39m、南端と北端との差は北端が3cm低い。SD03・SD04との重複関係はSD03より新しく、SD04とはわからぬ。遺物の出土はない。

SD-06 (第6・10図)

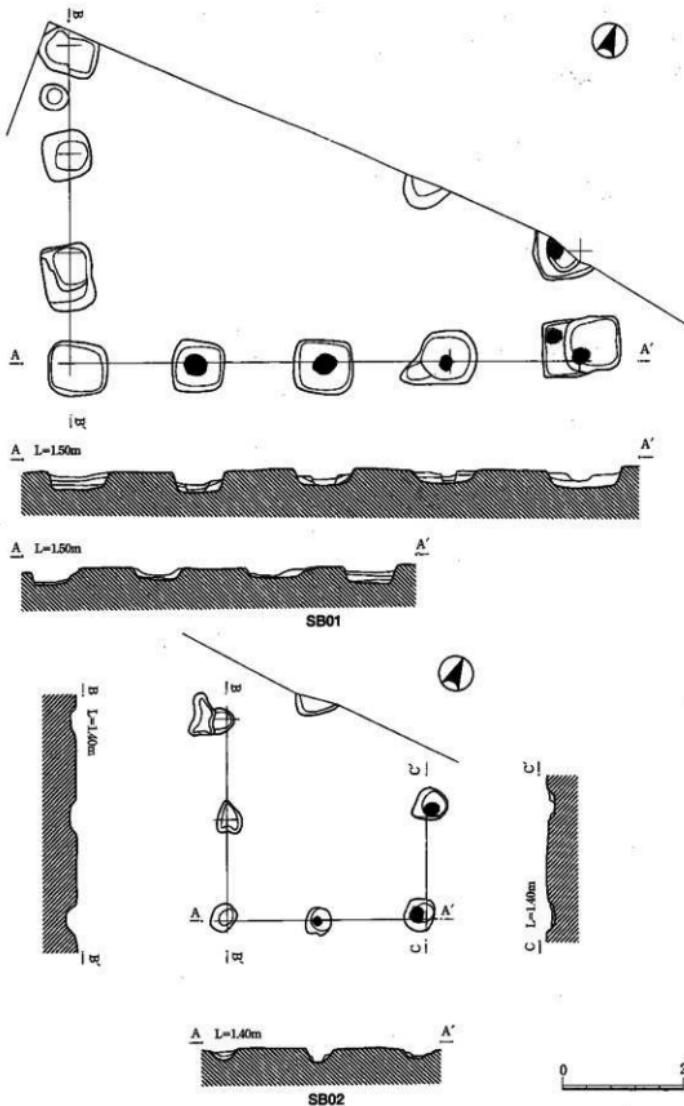
東調査区のX41,Y41~X36,Y56で検出された、溝跡である。方向はN-108°-W、溝幅は1.00m・深さ0.08~0.12m、西端と東端との差は東端が4cm低い。遺物の出土はない。

SD-07 (第6・10図)

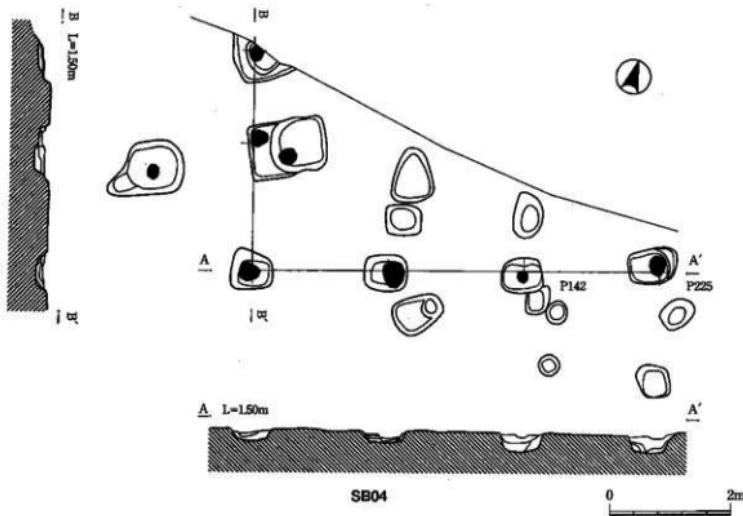
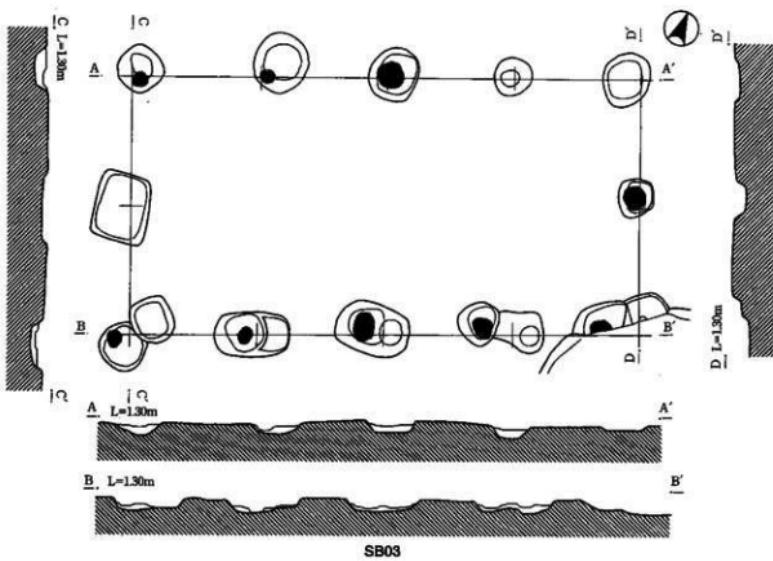
東調査区のX25,Y44~X35,Y55で検出された、溝跡である。方向はN-27°-Wで中途から緩やかに反っている。溝幅は0.30~0.60m・深さ0.17~0.32m、南端と北端との差は北端が15cm低い。遺物の出土はない。



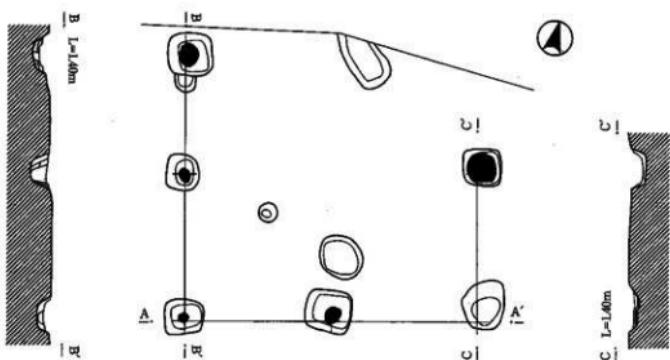
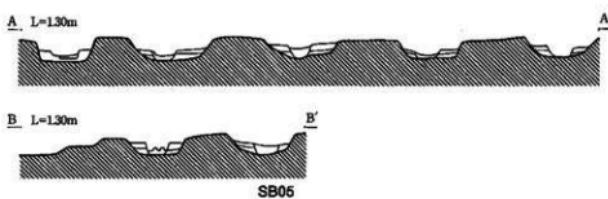
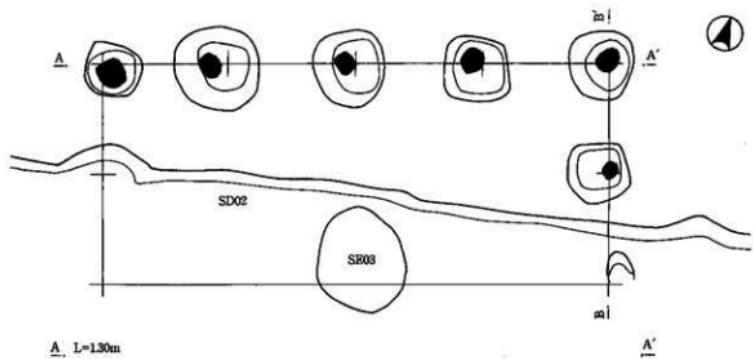
第10図 遺構略図(約1/800)



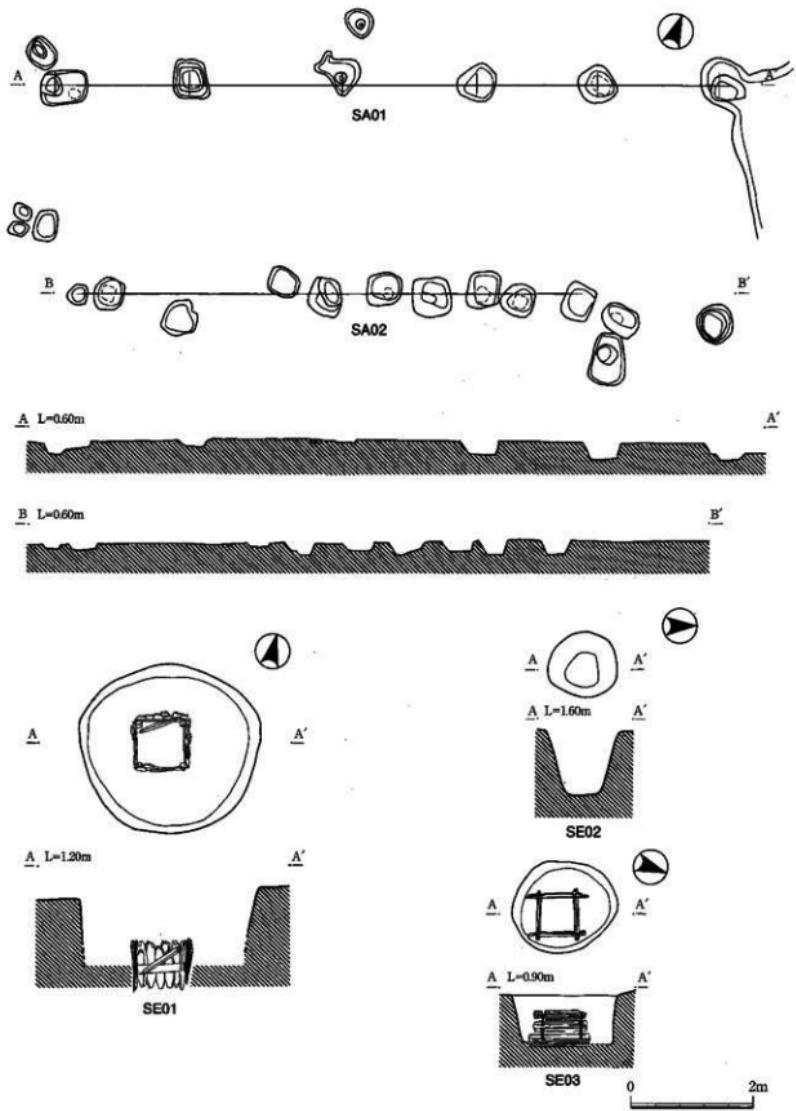
第11図 SB01・02実測図



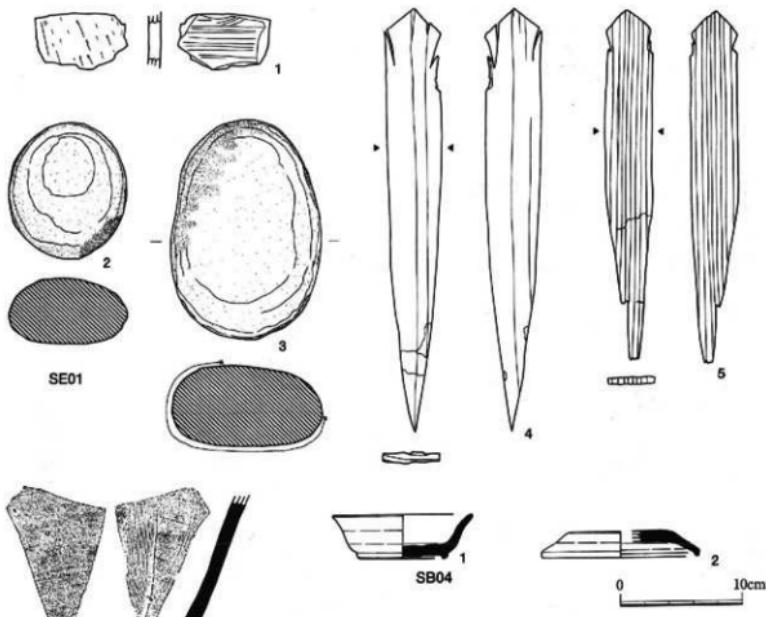
第12図 SB03・04実測図



第13図 SB05・06実測図



第14図 SA01・02、SE01～03実測図



第15図 SE01・04、SB04遺物実測図 (4・5はS:1/2)

3. 遺 物

SB04 (第15図)

1はP142 (南柄側東から2番目)とP155から出土し、接合した須恵器壺Bである。口縁～体部は高台より丸みを有して外反する。口径(11.4cm)、底高(7.3cm)、器高(3.5cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。2はP225 (東妻側南端)出土の須恵器蓋である。器形は台形状を呈し、口縁端部は折れ曲がる。調整は回転ヘラ削り、復元口径は(12.8cm)である。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。

SE01 (第15図)

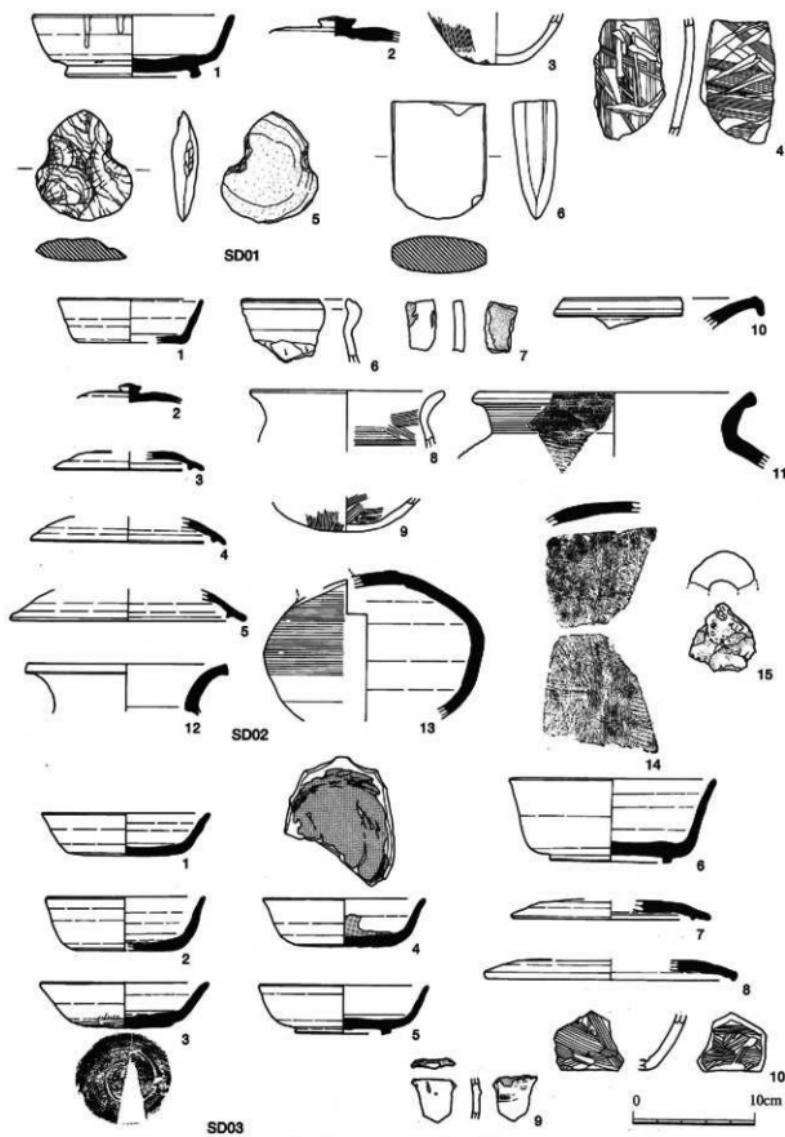
1は土師器壺の胴部片である。調整は外部継位ヘラ削り、内部刷毛目で外部には煤が付着する。2・3は花崗岩の円錐でいずれも使用痕は見られないが、ともに煤が付着する。特に3は表裏に顕著に見られる。重さは2が850g、3は2,320gである。4・5は煮串で材質はいずれも杉材である。長さは4が(14.3)cm、5は完存品で17.0cmである。ともに頭を尖らせ、頭脇に切れ込みを入れる。

SE04 (第15図)

1は珠洲焼の割り鉢片である。内部には15本単位の細かい条線が放射状に施されている。胎土は海綿骨針が顕著で、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。

SD01 (第16図)

1は須恵器壺Bである。口縁～体部は下端に棱を有して開く。口径(16.6)cm、底径11.1cm、器高



第16図 SD01～03遺物実測図

5.1cm。調整は底部切り離しが回転ヘラ切り、外体部下端は回転ヘラ削り、内部は指ナデである。わずかに火襷が見られる。胎土は白色粒が顯著で、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

2は須恵器蓋で口縁部を欠損する。鉢は扁平宝珠形で鉢の周囲を除き回転ヘラ削りされる。天井内部には自然釉が多量に付着し、蓋は天井部を下にする重ね焼き法と見られる。胎土は白色・褐色粒が顯著で、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

3・4は土師器壺である。3の底部は丸みのある平底で外胴～底部は細かな刷毛目調整、内底部はヘラナデとなる。外胴～底部には被熱痕・煤が顯著に見られる。胎土は透明・褐色・シルト小礫を含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。4は胴部片で調整は内・外刷毛目と部分的にヘラ磨きが見られる。外胴部には煤が付着する。胎土は金雲母・シルト粒が見られ、焼成は酸化堅緻、色調は黃灰色を呈する。

5・6は石斧である。5は花崗岩製の打製石斧で剥片素材を両側面にノッチを入れ分銅型に調整している。長さ9.0cm、幅7.9cm、140gである。6は砂岩製の大型の磨製石斧で上部は欠損する。上下は丸く、両側面は平坦となし丁寧に磨いてある。刃部には刃面に対して直行する使用痕が窺える。上位の欠損部は割れ口を蔽打して丸みを付け、欠損後も使用されている。長さ9.6cm、幅7.6cm、420gである。

S D O 2 (第16図)

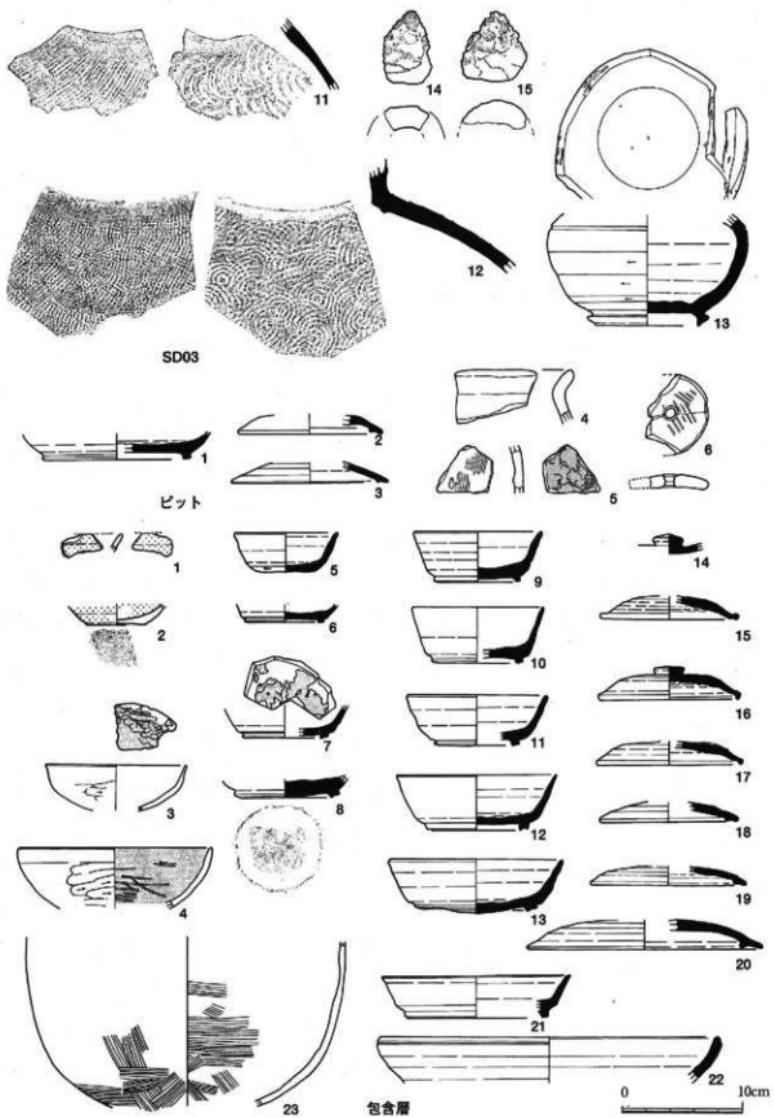
1は須恵器壺Aで口径と底径の差が少ないタイプである。口径11.8cm、底径8.0cm、器高3.6cm。調整は底部回転ヘラ切り後、一方向のヘラナデを施す。胎土は白色粒少・黒色粒多を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。

2～5は須恵器蓋である。蓋(3～5)の口縁部には内側にかえりが見られ、扁平の宝珠鉢(2)が付くものもある。3～5の蓋は口径の差により法量の分化が認められる。いずれも天井部の調整は回転ヘラ削りである。2は器高(1.4cm)。胎土は白色粒少・黒色粒多を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。3は口径(12.2cm)、器高(1.5cm)、胎土は細かな白色粒・黒色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。4は口径(16.0cm)、器高(2.1cm)、胎土は白色粒多、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈し、天井部には降灰が顯著である。5は口径(19.4cm)、器高(2.5cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元軟質、色調は灰色を呈する。

6～9は土師器壺である。6は長胴壺の口縁部で「くの字」形に屈曲する。胴部は綻位ヘラ削りである。胎土は白色粒・シルト粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は橙黄褐色を呈する。8の口縁部は外反する。調整は外部は荒れにより分からないが、内面頸部には刷毛目調整が施される。復元口径は(16.0cm)、胎土は白・灰色粒・金雲母粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。7は胴部片である。内外に漆(黒漆)が付着し、漆は胴部の割れ口にまで及ぶ。胎土は白・褐色粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は橙黄褐色を呈する。9は底部で丸底となる。調整は内外刷毛目を施すが、内部は荒く、外部は細かい区別がなされ、外底部には被熱痕が顯著である。胎土は白・褐色粒・金雲母を含み、焼成は酸化堅緻、色調は橙黄褐色を呈する。

10・11は須恵器壺の口縁部である。10の調整は頸部がカキ目、外胴部は平行叩きである。胎土は細かな白色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。11は端部で折れ曲がるタイプで調整はナデ主体である。胎土は細かな白色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色(断面は黄灰色)を呈する。

12は須恵器横瓶の口縁部である。内頸部に同心円の当て具痕が残る。口径(16.4cm)、胎土は白色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。



第17図 SD03・ピット・包含層遺物実測図

13は須恵器平瓶である。復元形態はややすんぐりした胴部である。天井内部に閉塞部、外部にはボタン状の把手退化型が遺存する。胴部全体はカキ目調整、下位は回転ヘラ削りを施す。注ぎ口の頸部付近には樹状工具（カキ目原体）での刺突が施される。胴部最大径は18cmである。胎土は白色粒を含み、焼成は還元軟質でやや砂っぽい、色調は灰色を呈する。

14は須恵器横瓶の胴端部である。調整は外部が平行叩き後カキ目、内部は同心円当て具後ナデである。胎土は白色粒を多く含み、焼成は還元軟質、色調は明灰色を呈する。

15は轆の羽口ある。羽口先端は還元化され黒・灰色となり、溶解している。羽口の内径は2.40cmに復元される。

S D 0 3 (第17図)

1～4は須恵器壺Aである。1は口径と底径の差が少ないタイプのなかでも浅く口縁部が開く。底部の調整は回転ヘラ切り無調整、内底部は指ナデが施される。口径13.6cm、底径9.0cm、器高3.5cm。胎土は白色小粒を含み、焼成は還元軟質、色調は灰黄色を呈する。2は口径と底径の差が少ないタイプである。口径13.0cm、底径8.0cm、器高4.4cm。調整は底部回転ヘラ切り後、一方向のヘラナデを施す。胎土は白色小粒・白色角粒・黒色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。3は1と同じタイプで胎土・焼成・色調はほぼ同じである。底部の調整は回転ヘラ切り無調整後ヘラナデ、内底部は指ナデが施される。口径13.6cm、底径7.5cm、器高3.7cm。4は1・3と同タイプである。また内底部には漆が多量に付着し、4が漆のパレットとして使用された事が分かる。漆は大半はめくれ上がっているが、特に内底部の周縁の漆は厚く黒色だけでなく褐色も混じる。

5・6は須恵器壺Bである。5は腰が丸く高台断面が「M字」状となる。底部の調整は回転ヘラ切り後、ナデ調整を行う。口径14.0cm、底径7.8cm、器高4.0cm。胎土は白色粒・黒色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。6は大型の製品で腰は丸く高台断面が「M字」状となる。底部の調整は回転ヘラ切り後、指ナデ調整、内底部も指ナデ調整を行う。口径17.0cm、底径10.0cm、器高6.7cm。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

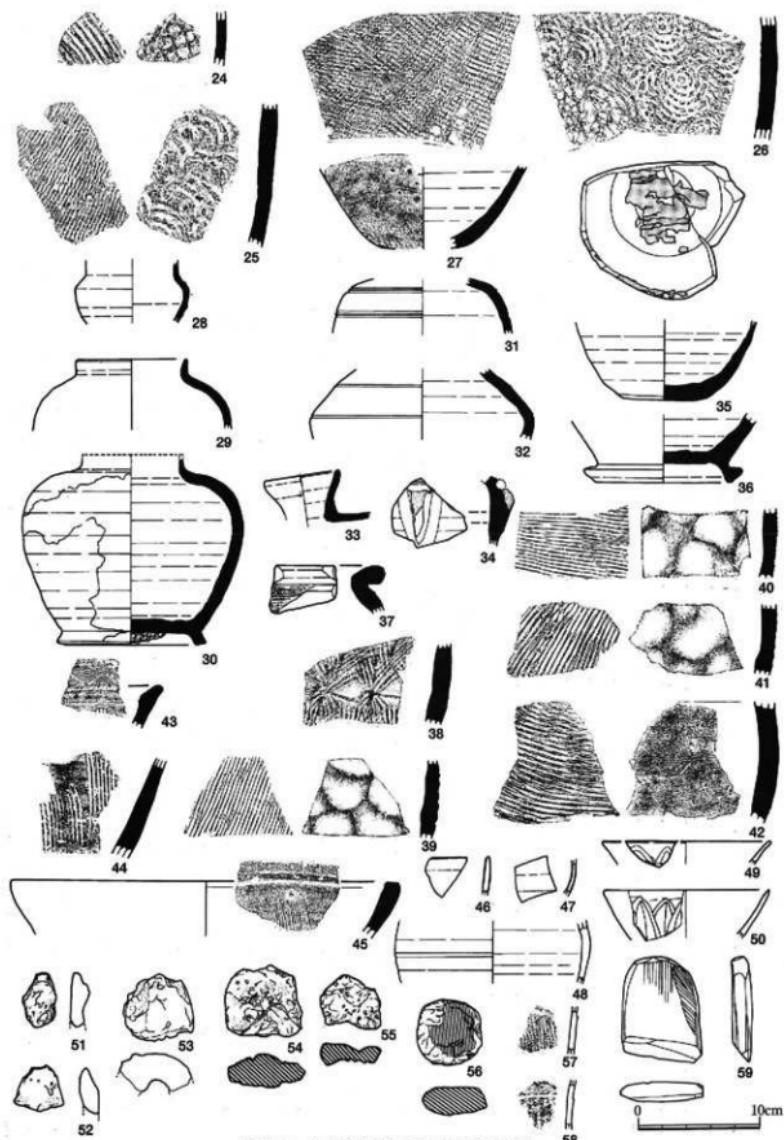
7・8は須恵器蓋である。7は口縁端部にかえりが残り、8は折れる。調整はいずれも天井部は回転ヘラ削りされるが、8はその後ヘラナデされるようである。復元口径は7が16.0cm、8が20.0cmと大型の壺B蓋である。7の胎土は白色粒を含み木目細かく、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。8は胎土に白色角粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

9・10は土師器壺である。9は胴部片で調整は内側に刷毛目が残る。内外面と割れ口にも漆が付着している。胎土は白色粒・褐色粒・海綿骨針を含み、焼成は酸化堅緻、色調は橙褐色を呈する。10は底部片で内外は刷毛目調整となる。胎土は白色粒・褐色粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。

11・12は須恵器壺の肩部片である。調整はいずれも内部は同心円当て具、外部は平行叩きを基本とし11はそれにカキ目が加わる。11の胎土は白色小粒・角粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。12の胎土は白色小粒を含み、焼成は還元軟質、色調は黄灰色を呈する。

13は須恵器長頸壺の胴部で、口縁～頸部は欠損している。胴部は偏球形を呈し肩、に沈線を施す。また割れ口の大半には漆が付着し、胴部内外には漆の付着がない事から接着剤として使用している。調整は底部回転ヘラ切り後に指ナデ、胴部は回転ヘラ削りを上位まで施す。底径10.2cm、器高(9.2cm)。胎土は白色小粒・角粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。

14・15は轆の羽口片である。いずれも還元化され先端は黒く溶解している。14の外径は6cm、内径は3cmである。15の外径は6cmである。



第18図 包含層遺物実測図 (59はS: 1/2)

ピット（第17図）

1はP198出土の須恵器坏Bである。口縁～体部は高台より丸みを有して外反する大振りの坏である。底径(12.2cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は黄灰色を呈する。2はP214出土の須恵器蓋である。器形はわずかにドーム状を呈し、口縁内部にはかえりを有する。調整は回転ヘラ削り、復元口径は(12.0cm)である。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。3はP165出土の須恵器蓋である。器形はわずかにドーム状を呈し、口縁内部にはかえりを有する。調整は回転ヘラ削り、復元口径は(13.0cm)である。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。4は土師器壺の口縁部片である。口縁部は「くの字」状に屈曲する。5は土師器壺の胴部片である。外面には刷毛目調整が施され、内部は黒色の漆が付着する。漆は割れ口にまで及んでいる。6は紡錘車である。紡錘車は土師器壺の胴部を再利用し、周囲を調整して研磨を加えている。穿孔は両面から行なっている。また壺の胴部に施された平行叩きがわずかに観察される。復元径は6.4cmである。

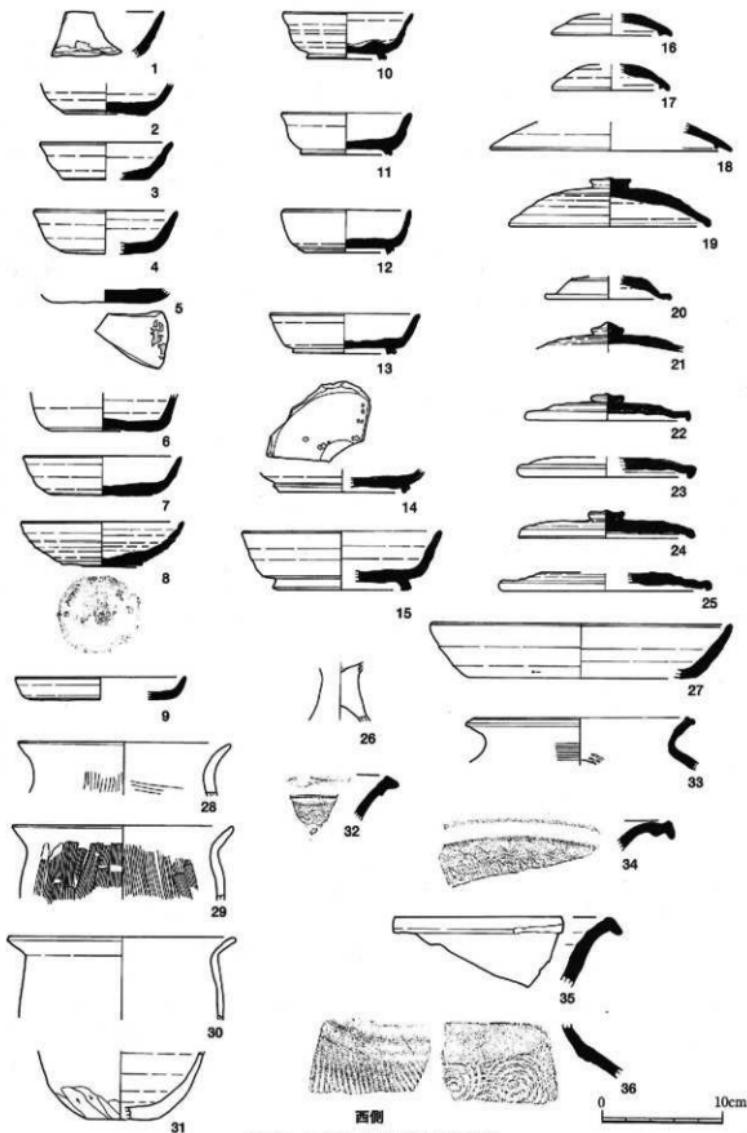
包 倉 層（第17・18図）

土師器

1～4は土師器坏である。1は土師器坏の口縁部片である。ロクロの痕跡が内外に見られ、また内外赤彩を施す。胎土は白色粒を少量含み、焼成は酸化堅緻、色調は赤褐色（素地は黄褐色）を呈する。2は土師器坏Aの底部である。底部は回転糸切り無調整で赤彩が内外面に施され底部まで及ぶ。復元底径は(4.7cm)胎土は細かな白色粒・褐色粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は明黄色を、赤彩は赤褐色を呈する。3は土師器非ロクロ坏の口縁部片で丸底タイプの坏である。調整は内外荒れているため明確でないが、わずかに外体部がヘラ削りと分かる程度である。また内部は漆のパレットとして使用されており、黒漆が全体に付着する。復元口径は(11.6cm)、器高は(3.8cm)となる。4は土師器坏Aで椀状を呈し平底となる。調整は内部はヘラ磨き・黒色処理、外部は口縁部周縁はヘラナデ、体部は横位ヘラ削りを施す。口径(16.0cm)、器高(5.0cm)、胎土は白色粒・褐色粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。

須恵器

5～13は須恵器坏である。5は須恵器坏Aである。小型の坏で口径と底径の差が少ないタイプである。底部の調整は回転ヘラ削り後にナデとなる。口径(8.6cm)、底径(5.0cm)、器高3.2cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。6は須恵器坏Bの底部である。体部は下端に稜を付けて開き、高台は断面小さな「M字」状を呈する。内底部のナデ調整は見られない。底部の切り離しは回転ヘラ切りを行ない。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。7は須恵器坏Bの底部片である。口縁～体部は高台から稜を有して開くタイプである。内底部には褐色の漆が付着しており、パレット的に使用されたものと思われる。褐色の漆は生漆であろう。底径(7.0cm)、器高(2.8cm)、胎土は白色小粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。8は須恵器坏Bの底部である。底部は厚く高台と同じとなり高台断面は「M字」状を呈する。底部の切り離しは回転ヘラ切りを行ない。後に刷毛目状工具でヘラナデを施す。底径は8.7cmである。胎土は白色粒を含み、焼成は還元軟質、色調は黄灰色を呈する。9は須恵器坏Bである。体部下端は丸く納め、口縁～体部は高台から連続する。口径10.6cm、底径7.1cm、器高4.1cm、胎土は白色微粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。10は須恵器坏Bの底部である。口径と底径の差が少ない器形で、体部下端は丸く納めるのが鋭角的である。復元すると口径(10.9cm)、底高7.5cm、器高4.6cm、胎土は白・黒色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。11は須恵器坏Bである。体部下端は丸く納める。口径(11.7cm)、底径(7.0cm)、器高4.1cm、胎土は白色微粒を多く含み、焼成は還元堅緻、



第19図 西側排土置き場遺物実測図

色調は青灰色を呈する。12は須恵器壺Bである。体部下端は丸く納め、口径と底径の差が少ないタイプである。高台の断面は明確な「M字」状を呈する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで成形時のロクロ目は少ない。口径(13.2)cm、底径(8.4)cm、器高4.5cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。13は須恵器壺Bのほぼ完形品である。口径と底径の差がなくタイプで、体部下端と、底部を丸く納める。また底部は高台より深い。高台の断面は「M字」状となるが擦れて丸くなっている。成形は粘土紐でのロクロ水挽き、切り離しは回転ヘラ切りである。ヘラ切り後にナデと思われるが擦れて定かではない。口径14.5cm、底高10.0cm、器高4.4cm、胎土は白・灰色粒φ1~2mmを多く含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

14~20は須恵器蓋である。15~17は口縁部が折れ、または丸く納めるタイプ、18~20は口縁部のかえりが残るタイプである。14~15~17は小型品で、19は復元口径(13.0cm)の小型品、20は復元口径(19.6cm)の大型品である。調整は天井部回転ヘラ削りであるが、19~20はいずれもその幅が広い。また20は内部指ナデが施される。19の胎土は白色粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は青灰色を呈する；20の胎土は白色粒を含み、焼成は未還元堅緻、色調は灰黄色を呈する。17が復元口径(12.0cm)、15は復元口径(11.5cm)である。14は鉢だけ形態は明確でないが、わずかに反りがあることから内蓋的な形態になろう。調整は回転ヘラ削りを基本とし、いずれもその後にナデを加えている。17の胎土は白色粒にわずかな黒色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。15の胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。14の胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。16は須恵器蓋である。天井部はやや平坦となり口縁端部は短く折れ曲がり、鉢は扁平宝珠となる。調整は天井部回転ヘラ削りの範囲狭く、後指ナデされる。口径(11.5cm)、器高2.7cm、胎土は白色角粒2~3mmを含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。18は須恵器蓋で口縁部のかえりが残るタイプである。天井部の回転ヘラ削りの範囲は広く口縁部付近にまで及ぶ。復元口径は(11.6cm)、胎土は白色微粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

21~22は盤である。21は盤Bの口縁~底部の破片である。口縁部は下位に稜を有して開き、口唇部は有段で、高台は逆台形を呈する。復元口径は(15.6cm)、底径(11.8cm)、器高(3.5cm)である。胎土は白色粒を少量含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。22は須恵器盤の口縁部片である。復元口径(28.0cm)、器高(3.8cm)、胎土は黑色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。23は土師器臺胴部片である。調整は内外刷毛目を施す。胎土は白色粒・褐色粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は明橙黄色を呈する。

24~27は須恵器壺である。24は須恵器壺片である。内部は格子當て具、外部は平行叩きが施される。胎土は白色角粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は暗灰色を呈する。25は須恵器壺片である。内部は同心円當て具、外部は平行叩き後にカキ目が施される。胎土は白色角粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は暗灰色を呈する。26は須恵器壺片である。内部は同心円當て具、外部は平行叩きが施される。胎土は白色角粒を多量に含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。27は須恵器壺底部である。調整は外肩部下位に格子目叩きが施される。また割れ口には黒色の漆が観られ、漆継ぎが行なわれている。

28~30は須恵器壺類である。28は須恵器短頸壺の胴部片である。肩は張らないタイプであろう。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。29は短頸壺の口縁~胴部片である。口縁部は短く立ち上がり、肩部は丸く張らないタイプである。復元口径は(9.0cm)である。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。30は須恵器短頸壺で口縁~胴部の一部を欠く。胴部は肩が張る偏球形で高台は「M字」状となる。口縁部は一部欠損するが器肉は薄いところから短頸壺とした。底部の切り離し回転ヘラ切り、調整はロクロナデである。口径(8.0cm)、底高(12.2cm)、

器高(15.6cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

31~36は須恵器瓶類である。31は長頸瓶(水瓶)の肩部片である。頸~胴部との間に沈線が2本を1単位とし、2本配されている。復元最大幅は(14.7cm)である。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色(素地は灰黄色)を呈する。32は長頸瓶の肩部片である。頸~肩部との間に沈線が2本配されている。肩部の復元幅は(18.6cm)である。胎土は白色微粒を含み、焼成は還元軟質、色調は灰色を呈する。33は須恵器平瓶口縁~頸部である。口縁部は内湾気味に開き端部で面をなす。頸部の右側には閉塞部が残る。口径6.0cm。胎土は白色角粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。外面降灰が見られる。34は須恵器双耳瓶の外耳部片である。わずかに穿孔が遺存し、外耳部の周囲はヘラ状工具でナデられる。穿孔の内径は7mmである。胎土は白・黒色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。35は須恵器瓶底部である。内底部には黒色の漆が多量に付着し削れ口にまで及ぶ。パレット的に使用されたものと思われる。調整は回転ヘラ切り後、ナデを施す。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。36は須恵器瓶底部である。高台は断面三角形を呈し底径は13.0cmである。調整はロクロナデで胎土は白色角粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

珠洲焼

37は珠洲焼臺の口縁部片である。口縁部は太く短く「くの字」となり、外脣部には平行叩きを施す。胎土は白色粒・海綿骨針を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

38~39·41~40·42は珠洲焼臺胴部片である。38は叩きの文様が花模様で、39·41~40·42は平行叩き、当て具はいずれも無文であるが、38は明確でない。38~39·41~40·42の胎土は白色粒・海綿骨針を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

43は珠洲焼摺り鉢の口縁部片である。口縁部は内側に面をなし櫛状工具で波状文を施す。その後口唇部を主体にナデされる。胎土は白色粒・黒色粒・海綿骨針を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

44は珠洲焼摺り鉢の体部片である。内体部は櫛状工具で11本以上の単位の条線を放射状に配する。胎土は白色粒・黒色粒・海綿骨針を多量に含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。

45は珠洲焼摺り鉢の口縁部片である。口縁部は内挽気味に開き内側に沈線を施す。口唇部は面をなし櫛状工具で波状文を施す。内体部は櫛状工具で16本単位の条線を放射状に配する。復元口径は(31.7cm)である。胎土は白色粒少量・黒色粒多量に含み、焼成は還元堅緻、色調は暗灰色を呈する。

瀬戸焼

46・47は瀬戸焼き天目茶碗片である。46の胎土はザックリとし、焼成は堅緻、釉調は艶やかな黒褐色を呈する。47の胎土はザックリとし、焼成は堅緻、釉調は茶褐色を呈する。48は瀬戸焼臺胴部片で内外に褐釉が施される。

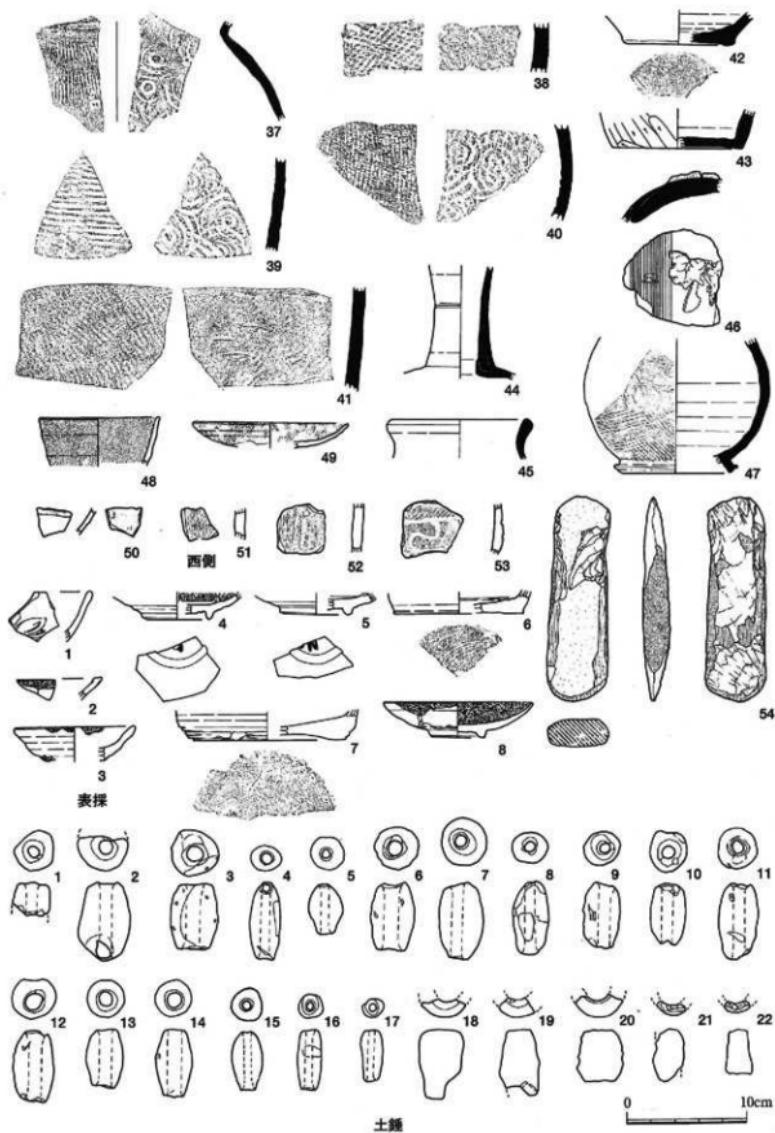
青磁

49は青磁碗の口縁部片で外体部に太目の蓮弁が意匠されている。復元口径は(13.8cm)、胎土は磁胎となり、焼成は還元堅緻、釉調はオリーブグリーン色を呈する。

50は青磁碗の口縁部片で外体部に鏽蓮弁が意匠されている。復元口径は(13.6cm)、胎土は磁胎となり、焼成は還元堅緻、釉調は青色を呈する。

羽口・鉄津

51~52は繩の羽口である。双方共に先端は還元化され溶解している。とくに52は黒色にガラス質化されている。53は羽口である。還元化され溶解している。54は鉄津、重さは100gである。55は鉄津、重さは96gである。



第20図 西側排土置き場・表探遺物実測図

石 器・繩文土器

56は石錘？である。上下面を軽く研磨し周縁は原形のままである。長さ5.5cm、幅5.3cm、重さ100g、石材は片岩系であろう。

57・58は縄文深鉢である。いずれも器面は荒れているがわずかに横沈線と縦位の単節縄文が施されている。胎土は白色・透明・褐色粒を多量に含み、焼成は酸化堅緻、色調は赤黄色を呈する。

59は扁平片刃石斧（整）である。刃を斜めに研ぎ出し全体を半円形とする。長さ4.2cm、幅3.2cm、重さ25g、素材は茶褐色を呈した主酸分の高い石材である。

西側排土置き場の遺物（第19・20図）

須恵器

1は壺Aの口縁部片である。内底部に黒色漆が付着する。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。2は壺Aの体～底部片である。体～底部は腰の張るタイプで。底部の調整は回転ヘラ切り後、ナデである。内底部は指ナデされる。復元底径は(7.0cm)、胎土は木目細かくねっとりした質感があり。断面に細い縞が観られる。焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。3は須恵器壺Aの口縁～底部片である。体～底部は丸みを帯びて開く。底部の調整は回転ヘラ切り後、ヘラナデである。復元すると口径(11.0cm)、底径(6.5cm)、器高3.0cm、胎土は灰色粒を含み、焼成は未還元堅緻、色調は明黄灰色を呈する。4は須恵器壺Aの口縁～底部片である。体～底部は丸みを帯びて開く。底部の調整は回転ヘラ切り後、ナデである。復元すると口径(11.9cm)、底径(7.4cm)、器高3.5cm、胎土は白色・透明粒を含み、焼成は未還元堅緻、色調は黄灰色を呈する。5は壺Aの底部片である。内底部に黒色漆が付着する。底部の切り離しは不明であるが、調整は櫛齒状工具でナデられる。胎土は白色粒を含み、焼成は未還元堅緻、色調は黄灰色を呈する。6は須恵器壺Aの体～底部片である。体～底部は丸みを帯びて立ち上がる。底部の調整は回転ヘラ切り後、ナデである。復元すると、底径(9.6cm)、胎土は白色粒・海綿骨針を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。7は壺Aである。口縁～底部は丸みを帯びて短く立ち上がり、底部の調整は回転ヘラ切りである。復元すると口径13.0cm、底径8.0cm、器高3.2cm、胎土は白色粒を含み、焼成は未還元堅緻、色調は明灰色を呈する。8は壺Aの体～底部片である。体～底部は内輪気味に開き、底部は段をなす。底部の調整は回転ヘラ切り後、櫛齒状工具でナデされる。一体にクロロ目が強く残る。また内底部のクロロ目凹凸からすれば壺というより蓋に近似する感がある。復元すると口径(13.4cm)、底径6.6cm、器高3.6cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。9は盤Aの口縁部片である。口縁～底部は丸みを帯びて短く立ち上がり、底部の調整は回転ヘラ切り後、ナデであろうか。復元すると口径(14.0cm)、底径(11.0cm)、器高1.8cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。10は壺Bの体～底部である。体部は高台から丸みを帯びて立ち上がり、底部の調整は回転ヘラ切りである。内底部は降灰・膨れが顕著である。復元すると、底径(6.6cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。11は壺Bである。体部は高台から丸みを帯びて立ち上がり口縁部はさらに開き、器肉はやや厚めの壺である。底部の調整は回転ヘラ切り後、ナデとなる。口径10.7cm、底径7.6cm、器高3.4cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は暗灰色を呈する。12は壺Bである。口縁～体部は高台から丸みを帯びて立ち上がる。底部の調整は回転ヘラ切りである。内底部は降灰が顕著である。復元すると口径(10.8cm)、底径(7.0cm)、器高3.5cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。13は壺B口縁～底部片である。口縁～体部は下端に稜を有して開く。底部の調整は回転ヘラ切り後、ナデとなる。口径(12.5cm)、底径(8.6cm)、器高3.3cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。14は壺B底部片である。内底

部にわずかではあるが黒色の漆が付着する。復元すると底径(11.4cm)である事から口径は16.0cm前後の大幅りとなろう。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。15は壺Bで口径と底径の差の少ない器形である。底部の調整は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り、口径(16.4cm)、底径(11.4cm)、器高4.8cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。16は蓋片で口縁部内側にはかえりが付く。天井は丸く、回転ヘラ削り調整がなされる。復元すると口径(10.0cm)、器高1.7cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。17は蓋片で口縁部内側にはかえりが付く。天井は丸く、回転ヘラ削り調整がなされる。復元すると口径(9.8cm)、器高2.2cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。18は蓋片で口縁部内側にはかえりが付く。天井は丸く大幅りで回転ヘラ削り調整がなされる。復元すると口径(20.0cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。19は蓋片で口縁端部は折り曲げられる。天井はドーム状をなし、鉢は扁平の宝珠鉢である。調整は回転ヘラ削りである。復元すると口径(16.8cm)、器高4.0cm、胎土は白色・灰色粒を含み、焼成は未還元堅緻、色調は明灰色を呈する。20は蓋片で口縁端部は折り曲げられる。天井は台形状を呈し面をなす。調整は回転ヘラ削りである。復元すると口径(10.4cm)、器高1.8cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。21・22は蓋片で、21は扁平宝珠鉢が付き、22の口縁端部は折り曲げられる。天井は薄く面をなし、鉢は扁平の宝珠鉢である。調整は回転ヘラ削り、内面は指ナデである。また平滑であり皿として使用された可能性がある。復元すると口径(13.8cm)、器高2.2cm、胎土は白色・灰色粒を含み、焼成は未還元堅緻、色調は明灰色を呈する。23は蓋片で口縁端部は折り曲げられる。天井は薄く面をなし平滑であるいは皿として再利用されていた可能性もある。調整は降灰によりわからない。復元すると口径(14.8cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。24は蓋片で口縁端部は折り曲げられる。天井は薄く面をなし、鉢は扁平の宝珠鉢である。調整は鉢周囲のナデにより不明である。復元すると口径(14.4cm)、器高2.2cm、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。25は蓋片で口縁端部は折り曲げられる。天井は薄い台形状を呈し面をなす。調整は回転ヘラ削りである。復元すると口径(17.6cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。27は須恵器盤の口縁～底部片である。口縁～体部は内反気味に開き口縁部内側に面をなす。調整は体部下端回転ヘラ削りである。復元すると口径(25.0cm)、底径(18.5cm)、器高3.9cm、胎土は白色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。

32は壺口縁部片である。口縁部は大きく外反し端部で上下に摘み出され、直下に突帯を巡らせ、周縁には櫛齒状工具での波状文を施す。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。33は壺口縁部片である。口縁部は大きく外反し端部で上下に摘み出される。調整は内部が同心円当て具、外部がカキ目である。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰褐色を呈する。34は壺口縁部片である。口縁部は大きく外反して端部で折れ曲がり、端部直下に断面三角形の突帯を巡らせる。また口縁部周縁には櫛齒状工具での波状文を施す。口径を復元すると約46cmになる。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。35は壺口縁部片である。口縁部は大きく外反して端部で折れ曲がる。口径を復元すると約44cmになる。胎土は白・灰色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は黄灰色を呈する。36は壺胴部片である。胴部は偏球形を呈し、調整には内部同心円当て具、外部は平行叩き後、数条のカキ目を施す。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。38は壺胴部片である。胴部は偏球形を呈し、調整には内部同心円当て具、外部は平行叩き後、数条のカキ目を施す。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。39は壺胴部片である。胴部は偏球形を呈し、調整には内部同心円当て具、外部は平行叩き後、数条のカキ目を施す。胎

土は白色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。39は壺胴部片である。胴部は偏球形を呈し、調整には内部同心円当て具、外部は格子叩きを施す。胎土は白色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。40は壺胴部片である。胴部は偏球形を呈し、調整には内部同心円当て具、外部は平行叩き後、数条のカキ目を施す。胎土は白色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。41は壺胴部片である。胴部は偏球形を呈し、調整には内部同心円当て具、外部は平行叩きを施す。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。42は壺底部片である。胴部は大きく開き、底部は平底を呈し復元すると(9.2cm)である。底部の切り離しは回転糸切り無調整である。胎土は白色粒・海綿骨針を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。43は壺底部片である。底部は平底を呈し復元すると(10.6cm)である。胴部下端は手持ちヘラ削り、内底部は指ナデとなる。胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。44は長頸瓶の頸部である。成型は三段成型で頸部の中位には沈線を施す。胎土は白色粒を多く含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。45は横瓶の口縁部片である。口縁部は外反し端部は厚く面をなす。復元口径は(12.1cm)、胎土は白色礫($\phi 5mm$)を含み、焼成は還元堅緻、色調は青灰色を呈する。46は横瓶の胴部片である。胴部側面に位置し閉塞が窓える。調整は内部が同心円当て具、外部はカキ目、胎土は白・灰色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は灰色を呈する。47は長頸瓶の底部片である。胴部には平行叩きを施す。復元底径は(9.0cm)、胎土は白色粒を含み、焼成は還元堅緻、色調は暗灰色を呈する。

土師器

26は高坏脚部で坏・脚端部は欠損する。脚部は短い柱状から大きく裾広がりとなる古式土師器の部類であろう。胎土は白色・褐色粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。28は壺口縁部片である。口縁部は緩やかに屈曲し、調整は内外荒い刷毛目を施し、外部は縦位、内部は横位である。復元口径は(17.5cm)、胎土は白色粒・褐色粒・透明粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は橙黄褐色を呈する。29は壺口縁部片である。口縁部は緩やかに屈曲し、調整は内外縱位刷毛目である。復元口径は(18.3cm)、胎土は白色粒・褐色粒・透明粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は橙黄褐色を呈する。30は壺口縁部片である。口縁部は屈曲し、調整は荒れにより不明である。復元口径は(18.8cm)、胎土は白色粒・褐色粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。口縁部に煤が付着する。31はロクロ壺の底部である。調整は底部下端を手持ちヘラ削りする。復元底径は(5.5cm)、胎土は白色粒・褐色粒・透明粒を含み、焼成は酸化堅緻、色調は灰黄色を呈する。

瀬戸焼・肥前系陶磁器

48は天目茶碗の口縁部片である。口縁～体部には屈折部はなく緩く湾曲しながら立ち上がる。復元口径は(10.0cm)である。胎土はザックリとした質感で、焼成は堅緻、釉色調は茶褐色を呈する。49は肥前系内野山窯の皿口縁部片である。口縁～体部は湾曲しながら開き、青緑色の施釉で内底部を蛇の目風に仕上げる特徴を有する。17世紀中葉に生産され18世紀前葉には中止されている。復元口径は(13.0cm)である。50は皿の体部片である。下端に回転ヘラ削りが施される。胎土はザックリとした質感で、焼成は堅緻、釉色調は枯緑色を呈する。

縄文土器・石器

51は深鉢の胴部片である。縦位に細い単節縄文を施す。胎土は白色粒を多く含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。52は深鉢の胴部片である。縦位に単節縄文を施す。胎土は白色・透明粒を多く含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。53は後・晩期の鉢型土器である。磨消縄文・三叉文を構成する。胎土は透明粒を多く含み、焼成は酸化堅緻、色調は黄褐色を呈する。54は打製石錘である。凝灰岩の縦長剥片を素材とし、表は自然面を極力生かしわずかな調整を加え、両側面は敲打し、

裏面は敲打と部分的に研磨で整えている。かなり使用されており刃部は丸く潰れている。長さ16.8cm、幅2.0cm、重さ300gである。

表探遺物

1は青磁碗口縁部片である。口縁部の端部は体部に比べ豊肥し、内部に蓮華文を施す。胎土は磁胎、釉調はオリーブグリーンで内外ひび割れている。2は瀬戸焼折縁皿の口縁部片である。釉の範囲は口縁部付近に見える。胎土はザックリとした質感で、焼成は堅緻、釉色調は緑枯色を呈する。3は瀬戸焼皿の口縁～底部片である。釉の範囲は口縁部付近に見える。胎土はザックリとした質感で、焼成は堅緻、釉色調は緑枯色を呈する。外底部には陶枕痕が残る。4・5は越中瀬戸の皿である。いずれも体～底部は回転ヘラ削りされ、高台も削り出されている。胎土は鉄分が多いため赤茶褐色、焼成は堅緻、釉調は灰黄色を呈する。また4・5の外底部には墨痕が見られる。6は瀬戸焼壺の底部片である。底部の切り離しは回転糸切りである。釉調は褐色を呈し内外底部に及ぶ。胎土はザックリとした質感である。底径は(10.8cm)である。7は瀬戸焼建水の底部片である。すでに焼成時には割れており、割れ口まで灰釉(黄褐色)を被る。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はザックリとした質感である。底径は(12.8cm)である。8は西衛排土置き場(49)と同様の肥前系内野山窯の皿である。

1～22は土鏡である。1はPit 9、2～5はグリッド、6は排土置き場、7～22は表探である。20を除き1～19、21は土師質で色調は明黄褐～橙色である。20・22は表面は荒れているが内面は褐色の釉が全体に残り、越中瀬戸の鏡釉に近似する。

木製品(第15・21～25図)

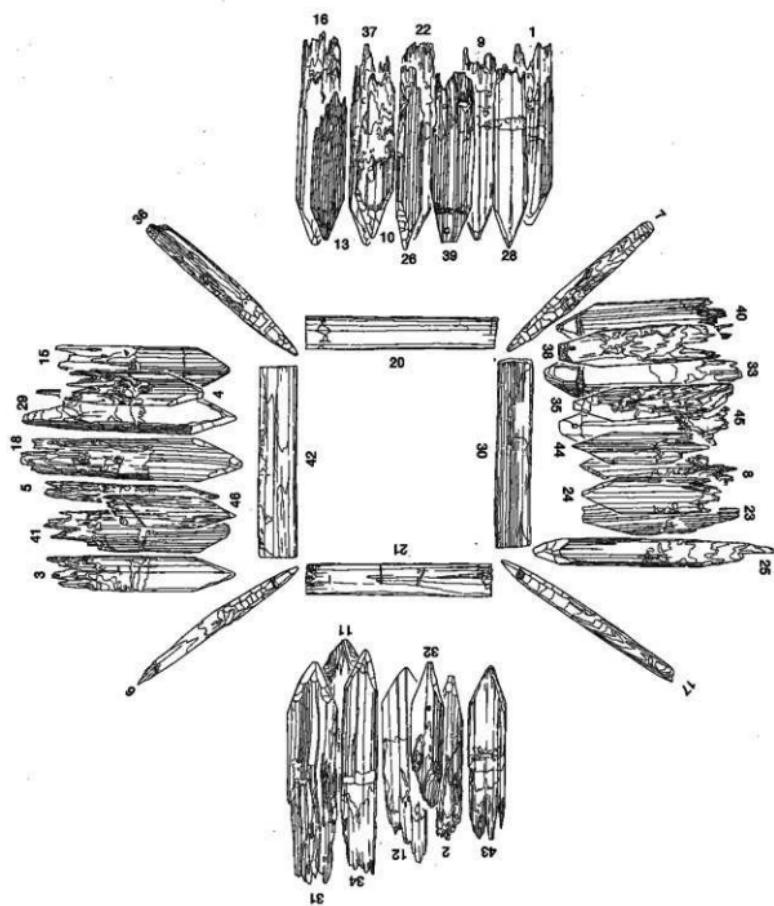
木製品はSE01-03の井戸枠のほか、SE01からの斎串(第15図)がある。当初SE02から箸が出土したとされていたが、整理調査段階で箸ではない事が判明した。

SE01の井戸枠は、継板組隅柱横桟どめ構造である。それぞれの部材は継板が35枚、隅柱4本、横桟は5枚(定型方形板4枚・細方形板1枚)から構成される。遺存する継板材は最大長1mで、腐食の頻度から少なくとも第IV層(地山:青灰色砂層)に40cmは打ち込まれている。内法は幅狭い(11cm前後)継板材で構成され、それに横桟がかまされ隅柱で固定し、外法に幅広い(18cm前後)継板材を内法の板材の間に目張りするようにさらに打ち込まれている。横桟の高さは継板材に接する部分の横方向の腐食で復元される。その位置は下からほぼ40cmであることから、地山にほどんど接した高さとなろう。また横桟どうしの接し方は、横桟に使用された板材の角に残る傷から第21図の様に復元されよう。

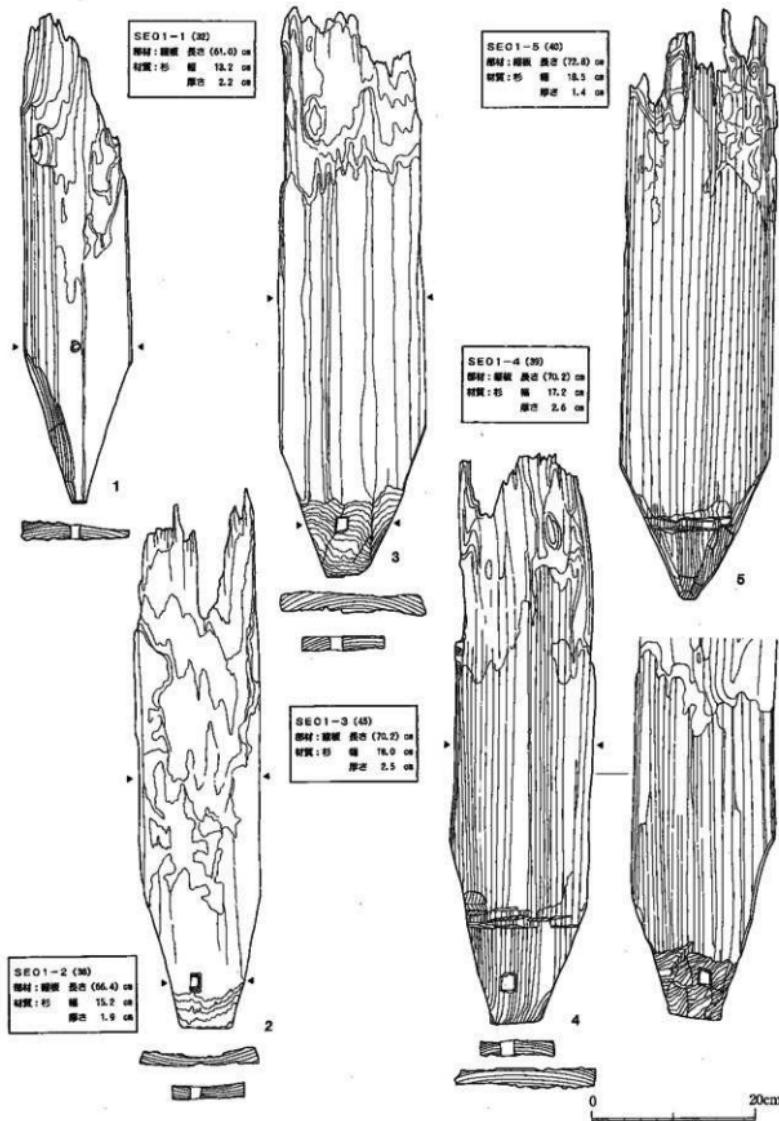
板材には、杉を使用している事は多くの事例が示している通りである(第4章を参照)。また板材には他の部材の転用(再利用)を示唆すべく枘、あるいは孔のあるものが見られ、鉄斧・鑿などの大工道具が彷彿とされる。また継板の中には幅広(20cm)で側面が加工された面をなすものもあり、建築部材からの再利用も十分にあり得る。第22～25・27～29図は、使用された各部材のなかの転用材と思われる板材を主に抽出して掲載した。

1～10は継板に使用された板材である。の中でも1～4は鑿による角孔が開いている。角孔は1～2cmであり、鑿幅は少なくとも幅1cm・幅2cmの2種類が予想される。また4～6には尖部近くの横方向に幅約2cmの傷がある。この傷は鑿による一定の幅での細工ではなく、鉄斧などで敲打されたものと思われる。これらはいずれも尖らせた部分にある。おそらく中途からでは折れたり、腐食の原因となるため、特に腐食し難い地山に打ち込まれる範囲を想定した上での配慮であろう。

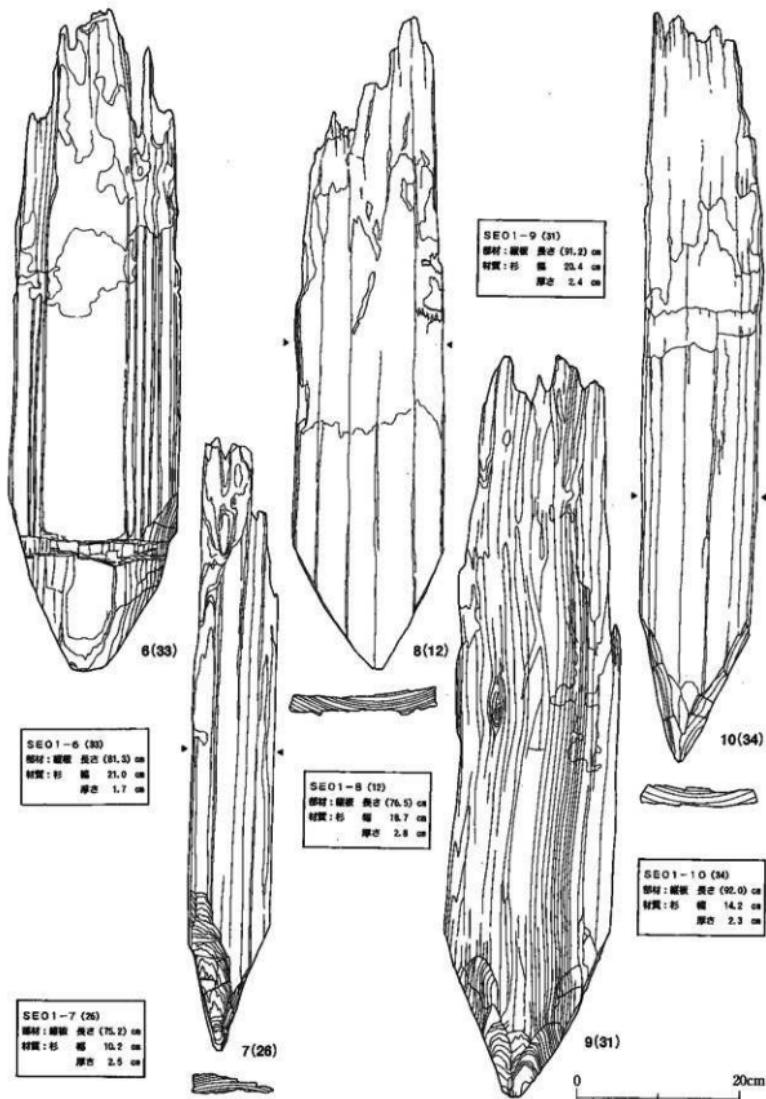
12～15は隅柱に使用された角材である。角材は平均7cm角で、尖らせた削りの範囲は30～35cmに亘る。16～20は横桟に使用された板材である。長さは77～82cm、幅は13～15cm、厚さは1.5～2.3cm



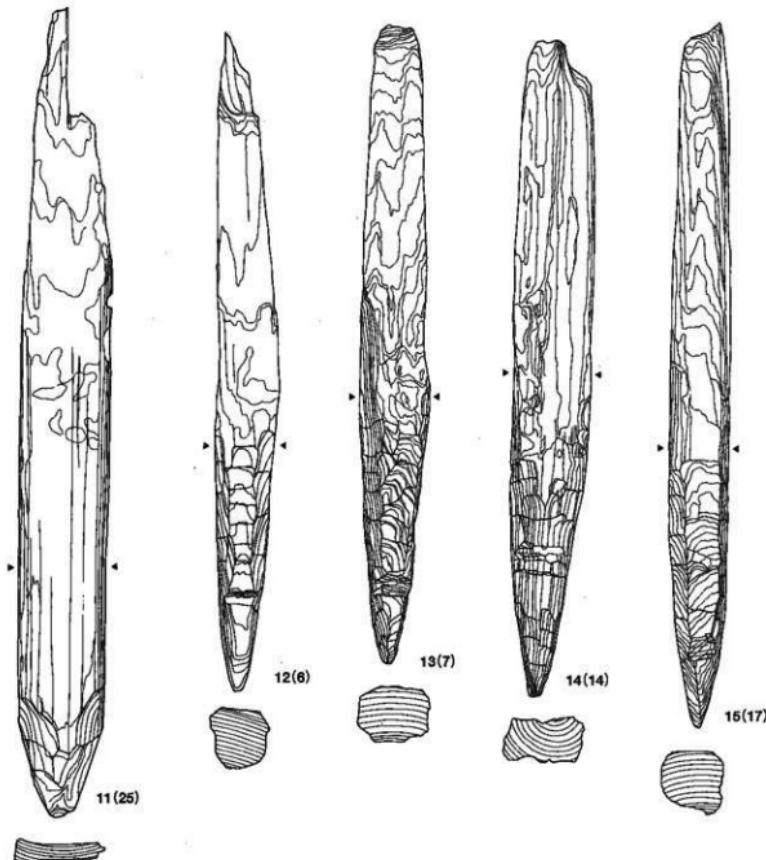
第21図 縦板組隅柱横桟どめ構造の井戸枠各部材



第22図 繼板組隅柱横棧どめ構造の井戸神継板実測図(1)



第23図 縦板組隅柱横棟どめ構造の井戸枠縦板実測図(2)



SEO1-11(25)
材料：鋼筋 厚さ (9.7) cm
材質：杉 横 11.0 cm
厚さ 2.4 cm

SEO1-12(6)
材料：鋼筋 厚さ (81.2) mm
材質：杉 横 7.5 cm
厚さ 7.6 cm

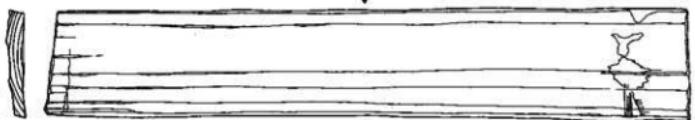
SEO1-13(7)
材料：鋼筋 厚さ (75.0) mm
材質：杉 横 8.8 cm
厚さ 7.0 cm

SEO1-14(14)
材料：鋼筋 厚さ (81.0) cm
材質：杉 横 8.7 cm
厚さ 5.4 cm

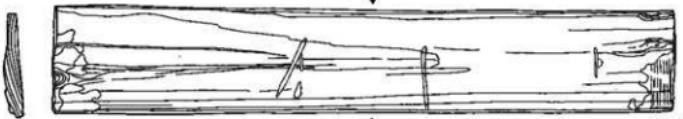
SEO1-15(17)
材料：鋼筋 厚さ (87.0) cm
材質：杉 横 7.3 cm
厚さ 7.9 cm

0 20cm

第24図 縦板組隅柱横棧どめ構造の井戸枠構造実測図



16(20)



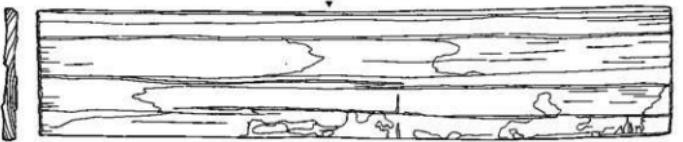
17(21)



18(30)



19(36)



20(42)

SEO1-16 (20)
部材：横板
長さ 80.0 cm
材質：杉
幅 13.0 cm
厚さ 2.3 cm

SEO1-17 (21)
部材：横板
長さ 77.3 cm
材質：杉
幅 12.8 cm
厚さ 2.2 cm

SEO1-18 (30)
部材：横板
長さ 72.4 cm
材質：杉
幅 14.7 cm
厚さ 1.5 cm

SEO1-19 (36)
部材：横板
長さ 82.8 cm
材質：杉
幅 15.6 cm
厚さ 1.1 cm

SEO1-20 (42)
部材：横板
長さ 78.5 cm
材質：杉
幅 15.4 cm
厚さ 1.6 cm

0 20cm

第25図 線板組構柱横桟どめ構造の井戸枠横桟実測図

表1 SEO1井戸枠部材規格表

図面No.	台帳No.	部材名	遺存長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	材質	備考
1	32	板	61.0	13.2	2.2	杉	孔有り
2	38	板	66.4	15.2	1.9	杉	孔有り
3	45	板	70.2	18.0	2.5	杉	孔有り
4	39	板	70.2	17.2	2.6	杉	孔有り
5	40	板	72.8	18.5	1.4	杉	切り込み有り
6	33	板	81.3	21.0	1.4	杉	切り込み有り
7	26	板	75.2	10.8	2.5	杉	切り込み有り
8	12	板	76.5	18.7	2.8	杉	
9	31	板	91.2	20.4	2.4	杉	
10	34	板	92.0	14.2	2.3	杉	
11	25	板	99.7	11.0	2.4	杉	
12	6	板	81.2	7.5	7.6	角材	
13	7	柱	79.0	8.8	7.0	角材	
14	14	柱	81.0	9.7	5.4	角材	
15	17	柱	87.0	7.3	7.9	角材	
16	20	柱	80.0	13.0	2.3	角材	
17	21	柱	77.3	12.8	2.2	角材	
18	30	柱	77.4	14.7	1.5	角材	
19	36	柱	82.8	5.6	1.3	角材	
20	42	柱	78.5	15.4	1.6	角材	
1	1	板	74.6	18.0	2.2	杉	
2	2	板	67.4	12.1	2.1	杉	
3	3	板	78.0	13.0	1.5	杉	
4	4	板	57.5	13.5	1.6	杉	
5	5	板	72.0	8.2	1.6	杉	
6	8	板	65.0	14.1	2.2	杉	
7	9	板	65.0	16.1	1.8	杉	
10	10	板	65.3	16.3	1.8	杉	
11	13	板	60.5	18.5	2.8	杉	
12	15	板	65.3	20.0	1.7	杉	
13	16	板	72.0	12.5	2.4	杉	
14	18	板	72.5	16.0	1.6	杉	
15	19	板	89.2	17.5	1.4	杉	
16	22	板	81.3	15.6	1.5	杉	
17	23	板	65.5	16.6	1.5	杉	
18	24	板	57.5	15.0	2.5	杉	
19	27	板	75.5	10.5	2.4	杉	
20	28	板	75.0	14.4	2.4	杉	
21	29	板	88.0	18.0	1.8	杉	
22	35	板	65.4	12.6	2.5	杉	
23	37	板	82.4	15.3	2.2	杉	
24	41	板	76.4	17.6	1.3	杉	
25	43	板	71.5	15.4	2.8	杉	
26	44	板	56.5	13.0	2.0	杉	
27	46	板	54.9	13.1	2.0	杉	

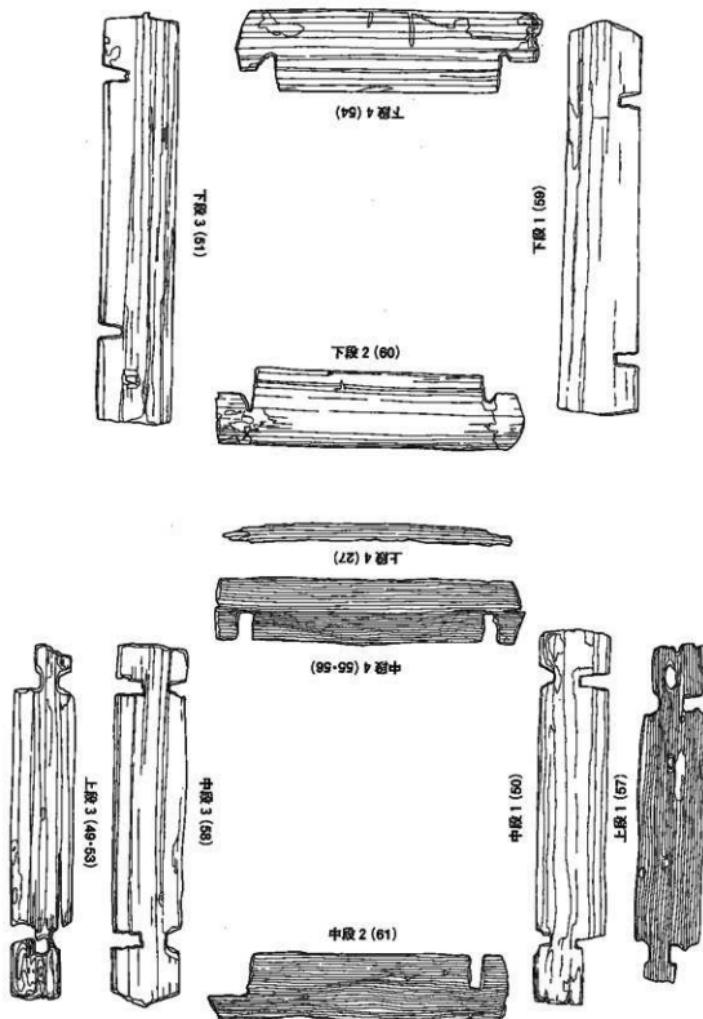
であり、いずれも両木口は面をなし鋸などで加工され、板目は面をなすものの滑沢ではなく、凹凸が残るところから継割りされた板材であろう。

SE03の井戸枠は、横板井笠組み構造である。井戸掘り形底部から3段目までの遺存であった。横板は、段ごとにそれぞれ四枚で組み合わされ、それを重ねて積み上げている。素材はSE01と同様の杉である。(上下の関係は第26図参照)

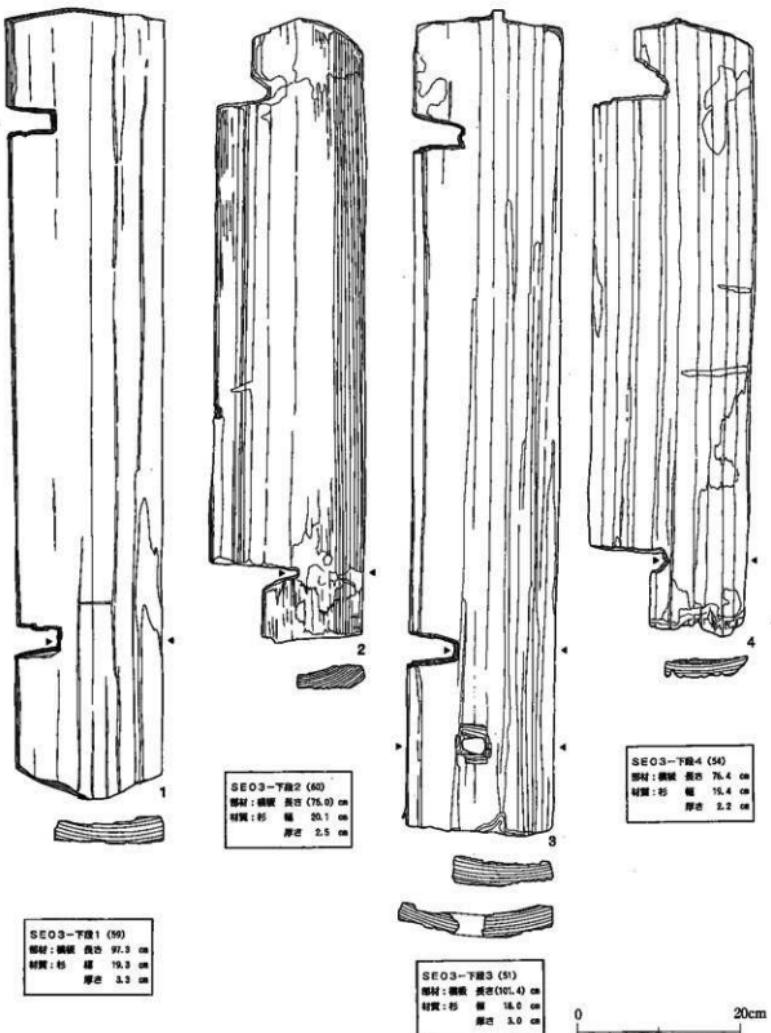
組み合わせの方法は、1段目(下段)の井戸枠は東西がやや長く、南北側がやや短い傾向にある。この傾向は、組み合わせの切れ込みにまで及び、東西側の切れ込み長は63cm、南北側は58cmである。

したがって井戸枠の内法は、板材の厚さを考慮して東西側が60cm、南北側は55cmの方形となる。

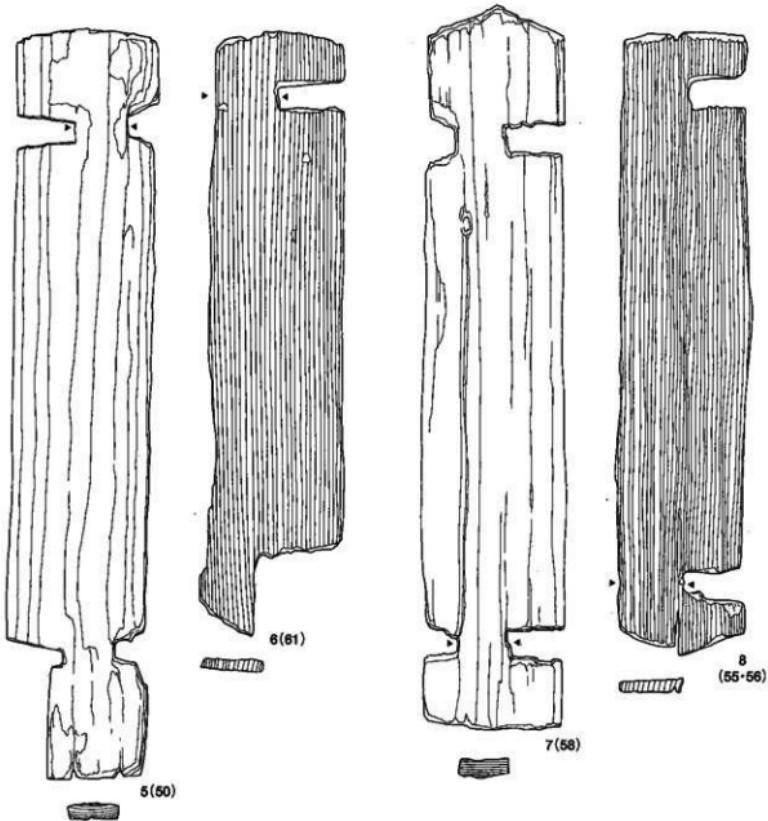
各横板の切れ込みは、4枚共に上方側の一方向から施され、上幅3cm、下幅2cm、深さ5cmの逆台形状を呈する。道具は切れ込みの側面が面をなさず、凹凸がある事から鋸ではなく、鉄斧などの刃物を使用したと思われる。2段目(中段)は切れ込み長はやや短く東西側62cmである。東西側が上下の2方向から、南北側は下の1方向となる。東西側の上下の切れ込みの幅は変わらないが、深さが上7cm、下4cmとなり、南北側は7cmである。施工工具は1段目(下段)と同様である。3段目(上



第26図 横板井籠組み構造の井戸枠各部材

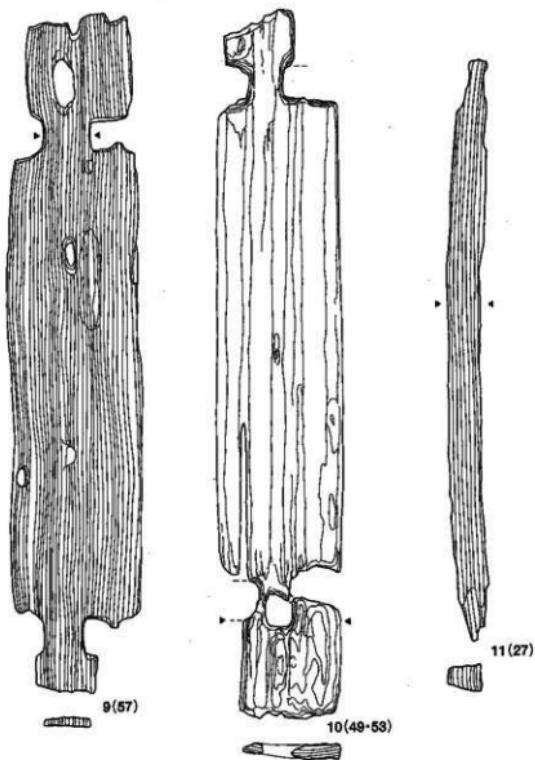


第27図 横板井籠組み構造の井戸枠横板実測図(1)



0 20cm

第28図 横板井戸組み構造の井戸枠横板実測図 (2)



SEO3-9上段 (57)
部材：檜板 長さ 89.3 cm
材質：杉 幅 18.3 cm
厚さ 2.2 cm

SEO3-10上段 (49-53)
部材：檜板 長さ 76.8 cm
材質：杉 幅 16.2 cm
厚さ 1.4 cm

SEO3-11上段 (27)
部材：檜板 長さ 71.6 cm
材質：杉 幅 4.3 cm
厚さ 3.1 cm

0 20cm

第29図 横板井籠組み構造の井戸枠横板実測図 (3)

段)は南北側のみの遺存である。横板は最も地表に近いため腐食が激しく計測数値は多少前後する。

東西側の切れ込み長は62cm、2段目(中段)の幅と変わらないが、深さが上が6cm、下が3cmである。横板の最大規模は長さ101.4cm、幅19cm、厚さ3cmである。転用材と見られるものは3と10に方形の孔が見られ、ともに3cm角である。また1・3・5・7の木口面は尖り気味になり、特に3は尖端部が方形状を呈するところから工具により両方向から削られたが、完全には至らなかった結果と見られよう。この場合施工工具は鉄斧が考えられる。

表2 SEO3井戸枠部材規格表

図面No	台帳No	部材名	遺存長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	材質	備考
1	59	横板	97.3	19.3	3.3	杉	孔有り
2	60	横板	76.0	20.1	2.5	杉	
3	51	横板	101.4	18.0	3.0	杉	
4	54	横板	76.4	19.4	2.2	杉	
5	50	横板	92.4	17.3	2.0	杉	
6	61	横板	83.7	16.0	1.2	杉	
7	58	横板	74.4	16.6	1.4	杉	
8	55, 56	横板	87.2	15.5	1.8	杉	
9	57	横板	89.3	18.3	2.2	杉	
10	46, 53	横板	76.8	16.2	1.4	杉	
11	27	横板	71.6	4.3	3.1	杉	接合 孔有り 接合・孔有り

第4章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ

水橋荒町遺跡から出土した木製品等の樹種

はじめに

水橋荒町遺跡(富山県富山市水橋辻ヶ堂所在)は、常願寺川の右岸河口付近に位置する。今回の発掘調査により、縄文時代以降の遺構・遺物が検出されている。このうち、奈良～平安時代では、掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸跡などが計画的に配置されている様子が確認され、官衙的性格を持つ遺跡として推定されている。

本報告では、奈良～平安時代の井戸枠、斎串、柱痕について樹種同定を行ない、用材に関する資料を得る。

1. 試料

試料は井戸枠3点(試料番号SE01No1、SE03No52・54)、斎串2点(SE03No47・48)、柱痕1点(SB05P-192)の合計6点である。

2. 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クローラル(抱水クローラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

6点の試料は、全てスギに同定された。主な解剖学的特徴を、以下に記す。

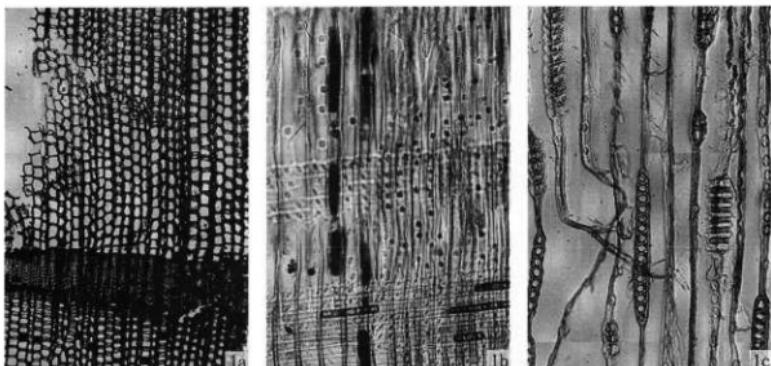
・スギ (Crypomeria Japonica (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

仮造管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

4. 考 察

木製品等は、スギであった。同様の製品にスギが利用された例は、各地で多数の報告例が知られている（島地・伊東、1988;伊東、1990）。スギ材は、木理が通直で加工も容易なことから、板材や角材の木製品や部材を製作しやすい。これらの材質の特徴が、木製品に多用されている背景と考えられる。また、本地域では、このほかにも多くの製品で多用されている（飯島・長谷川、1984;林、1989;鈴木・能城、1988、1992、1993;鈴木ほか1994;パリノ・サーヴェイ株式会社、1995）。花粉分析などに基づく古植生の調査では、過去にスギが広く生育していたことが明らかにされている（石井・山家、1934;植田・辻、1990;パリノ・サーヴェイ株式会社、1990;麻柄、1992）。したがって、スギ材の入手が容易であったことも、木製品に大量に利用された背景の一つとして考えられる。

図版1 木材



1. スギ (斎串 No.48) a : 木口、b : 柱目、c : 板目

200 μm : a

100 μm : b,c

ネガ番号	樹種名	資料番号	断面	撮影倍率	図版・写真番号
30	スギ	斎串No48	木口	12.5	1-1a
31	スギ	斎串No48	柱目	31.25	1-1b
32	スギ	斎串No48	板目	31.25	1-1c

引用文献

- 麻柄一志（1992）埋没林のはなし—埋没林研究の歴史を中心として—, p.81, 魚津埋没林博物館。
- 林 昭三（1989）越中上末庶出土炭の樹種, 「越中上末庶」, p.202-214, 富山大学人文学部考古学研究室
- 飯島泰男・長谷川益夫（1984）木製品の樹種, 「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品（本文）・総括編ー」, p.89-96.
- 石井逸太郎・山家基治（1934）富山懸魚津海岸に於ける埋没化石林, 史跡名勝天然記念物, 9, p.274-279.
- 伊東隆夫（1991）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II, 木材研究・資料, 26, p.91-189.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）布目沢東遺跡 自然科学分析報告, 大門町埋蔵文化財報告第7集「大門町企業団地内遺跡発掘報告(1) —布目沢東遺跡・布目沢北遺跡—」, p.81-118, 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1995）分析調査の結果, 「石川県小松市 平面梯川遺跡I 梶川改修工事関係埋蔵文化

- 財調査報告書1』, p.91-112, 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会。
- 島地 謙・伊東謙夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, p.296, 雄山閣。
- 鈴木三男・能城修一 (1988) 田名遺跡出土木製品の樹種の調査結果について、「田名遺跡」, p.56-70, 三方町教育委員会。
- 鈴木三男・能城修一 (1992) 金沢市西念・南新保遺跡出土木製品の樹種。「金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ」, p.285-290。
- 鈴木三男・能城修一 (1993) 石川県徳前C遺跡出土木製品の樹種。「慈前C遺跡」, p.65-83, 石川県埋蔵文化財センター。
- 鈴木三男・能城修一・西尾典子 (1993) 羽咋市吉崎・次場遺跡出土木製品の樹種。「吉崎・次場遺跡 第13次発掘調査」, p.171-187, 石川県羽咋市教育委員会。
- 植田弥生・辻 誠一郎 (1990) 福井県三方町牛屋遺跡空出土した弥生時代以降の木材遺体群、植物地理・分類研究, 38, p.43-50

第5章 まとめ

1. はじめに

水橋荒町遺跡は、これまで公共下水道水橋浄化センター建設に伴い、平成3~5年度の3カ年にわたり調査を実施してきた。その結果、大型の掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡などが多数検出された。遺物は奈良・平安時代の須恵器・土師器を主体とし、特徴的な遺物には平瓦・石帶・硯・漆付き土器・墨書き土器など遺跡の性格に関わるような出土が見られた。

遺跡の性格については、平成3~5年度の調査内容が「水橋の歴史」(1997小林)に触れられている。それによれば溝跡の区画と掘立柱建物群の配置からの企画性と、從来から水橋駅の推定域である事を重視し、遺物からは決め手に欠くとされながらも官衙的な性格をもつ遺跡として位置付けられている。

ここでは平成8年度の調査成果のまとめを行いあわせて平成3~5年度調査のSD01との関連を重視しその性格について若干触れてみたい。

2. 遺構

平成8年度の調査では、遺構は掘立柱建物跡6棟、井戸跡4基、横列2条、溝跡7条、土坑4基、そのほかピット多数が検出されている。

また、遺物包含層についてはその要因について分からぬ部分がある。遺跡は標高1~2mの低地である事から、おそらく西側に近接して北流する常願寺川の氾濫などの要因が考えられる。これについては今後の課題としたい。

建物跡で棟方向を同じくするものは、東西棟SB01-03-05(表3参照)で、南北棟はない。またこれらと妻方向を同じくする溝跡SD01-03もSB01-03-05と同方向とされよう。その他はSA01-02がこれに加わる。この他の建物跡(SB02-04-06)はわずかながら棟方向がズレ(東西棟SB04で4°東)ており、建物配列内での時期の異なるものとして見る事が可能である。SB06については位置・方向が他のものより異なるため、今後の調査に注目したい。

表3 挖立柱建物跡規模表(1尺:0.30m)

建物番号	規 模	棟 方 向	総 長m (尺)	桁行m : (尺)	梁間m : (尺)	柱 穴 m	備 考
S B O 1	4 × 3 間	N-68° E	8.40(28) × 5.20(18)	2.10 : 7 等間	2.10 : 7 等間	略方 1.0	SB01→SB04
S B O 2	2) × 2 間	N-27° W	(3.30) × 3.30(5.5)	1.65 · 1.65	1.65 · 5.5等間	横円 0.6	
S B O 3	4 × 2 間	N-68° E	8.40(28) × 4.20(14)	2.10 : 7 等間	2.10 : 7 等間	横円 0.8	SE03→SD02
S B O 4	3 × 2) 間	N-74° W	6.75(22.5) × (3.60)	2.25 : 7.5 等間	2.10 · 1.50	略方 0.7	SB01→SB04
S B O 5	4 × 2) 間	N-68° W	8.40(28) × (3.60)	2.10 : 7 等間	1.80 · 1.80	略方 1.0	SE03→SB05
S B O 6	2) × 2 間	N-14° W	(4.50) × 2.40(16)	2.40 · 2.10	2.40 · 2.40	略方 0.8	

建物・構列・溝跡を方向別に分類すると次のようになる。

A 群 N-68°-E (N-22°-W) を基準とする遺構 : SB01·03·05、SD01·03、SA01·02

B 群 N-74°-E (N-16°-W) を基準とする遺構 : SB04

C 群 N-27°-W (N-63°-E) を基準とする遺構 : SB02

D 群 N-14°-W (N-76°-E) を基準とする遺構 : SB06

遺構の配列は、A群を基準に模索してみるとまずSD01とSD03の上端外法が39m (130尺・「換算尺30cm」)、内法は34.5m (115尺) となり、これら①SD01と②SD03は内・外法を基準とする計画性が窺われる。これに並行する遺構はSB01とSB03である。SB01とSB03は西妻側の柱筋が通り、その③柱筋はSD01から東に外法4.50m (15尺)、内法3 m (10尺) の位置である。④SB01の北側柱筋と⑤SB03の南側柱筋間の距離 (外法) は21m (70尺)、SB01の南側柱筋とSB03の北側柱筋間の距離 (内法) は11.30m (37.67尺) である事から、少なくともSB01とSB03の間では③④⑤が、またそれぞれの距離は完数尺 (山中1994) となる事からも、企画性は高いと思われる。

④は大半が調査区外となるため建物の存在はわからない。⑤の延長線上ではSB05が配列されるが、SB05の北側柱筋は線上より北に1.20m (4尺) ズレしており、⑤と並行するが延長線上には乗っていない。しかしSB03とSB05の距離は15m (30尺) である事、またSB05東妻側と②の距離が5.60~6.00m (18.67~20尺) である事から、同時存在と配列内での時期差の可能性もある。

遺構の重複関係はSB01⇒SB04、SB05⇒SD02、SE03⇒SD02となる。またSB05とSE01間は3 m (10尺) あり、これは重複しない。SB05=SE01またはSE01⇒SB05もあり得る。

以上の事からA群は同時期と見てよい。SB01⇒SB04からはA群⇒B群が、またB群とD群とは角度の差がなく同時期存在あるいは近接するところから時間差の可能性も含まれる。C群は掘り形の規模が他の建物より小さく、A・B群に後続する建物であろう。

したがって遺構群の変遷は、A群⇒B・D群⇒C群が考えられるが、わずかな面積での結果である



第30図 建物跡と遺跡の企画性

事を考慮し、ひとつの傾向として捉えておきたい。

井戸跡については、SE01がSB03の北側柱筋の東延長線上にかかるところから、A群とする可能性もあるが、建物配列の状況が掘み切れていない現状では、保留しておきたい。

井戸枠についてはその規模あるいはつくり方の違いから、階級差として見れるかは今後の検討を要する課題（註2）であるが、律令社会における一地方の井戸のあり方として興味深いものがある。

3. 遺 物

遺物は、縄文時代の深鉢（後・晩期）・打製石斧・磨製石斧、弥生時代の扁平片刃石斧、古墳時代の高坏と奈良・平安時代の須恵器・土師器の他、木器・紡錘車・土鍤・羽口・鐵滓、中世の輸入青磁・珠洲焼・瀬戸焼、近世の越中瀬戸・肥前系陶磁器が出土している。

これらの遺物からは、縄文時代から近世に亘るおよそ4千年もの長い間、この地に断続的に人の営みがあった事が証明される。

ここでは、主に奈良・平安時代の遺物（土師器・須恵器）について述べ、遺物年代からの掘立柱建築・溝の構築年代を比定することとする。

土師器・須恵器の割合は圧倒的に須恵器が多い。土師器は食膳具が椀（赤彩・内黒）、煮沸具は大半が内外刷毛目仕様の非ロクロ壺で、ロクロ壺はわずかである。須恵器は食膳具が壺A・壺B・蓋・盤、貯蔵具が短頸壺・長頸壺・平瓶・横瓶・壺・双耳壺である。

表4 遺構からの出土遺物組成

遺 構	土 師 器	須 恵 器	そ の 他
SB04		壺B(1)・蓋(2)	青串
SE01	非ロクロ壺(1)	壺B(1)・蓋(2)	羽口(15)
SD01	非ロクロ壺(3・4)	壺A(1)・蓋(2~5)・壺(10~12)・平瓶(13)・横瓶(14)	
SD02	非ロクロ壺(6~9)	壺A(1~4)・壺(4~6)・蓋(7~8)	
SD03	非ロクロ壺(9・10)		

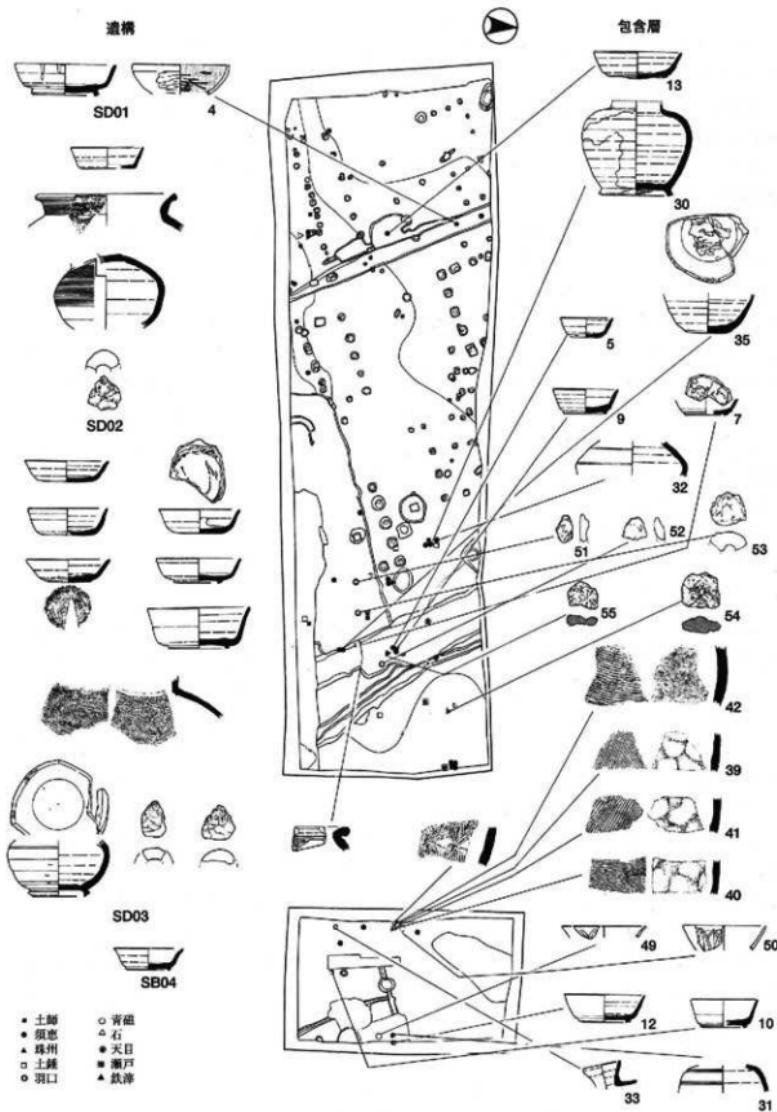
土師器

壺は、口縁部が「くの字」形に屈折し、胴一底部を刷毛目仕様とする非ロクロ壺（SD02-8）と、屈折して端部を肥厚させるロクロ壺（SD02-6）がある他は、大半は内外刷毛目仕様の丸底（SD01-3、SD02-9）で、ロクロ壺は客体的である。

非ロクロ壺は、内外を刷毛目仕様とし、底部には叩き・当て具痕がないのが特徴的である。これらの消長は基本的に非ロクロ壺→ロクロ壺であり、ロクロ壺の出現期での混在（坂井1989）も考慮せねばならないが、本遺跡の非ロクロ壺は、形態・調整から前時代の「古墳時代的な壺」（岸本1982）と思われ、いわば古墳時代的土器と律令的土器の狭間にあら土器と云えよう。

須恵器

蓋は、かえりがつく蓋Aと、端部で短く折れるものを蓋Bとする。これらは法量により、蓋Aは蓋A I（口径約20cm；SD02-5.包含層[Ho]-20.西排土[N]-18）、蓋A II（口径約16cm；SD02-4. SD03-7）、蓋A IV（口径約12cm；SD02-3. Ho-18-19）、蓋A V（口径約10cm（N-16-17）に分けることができる。また、口径14cm前後が見られないため蓋A IIIを想定しておいた。蓋B類も同様に、蓋B I（SD03-8）、蓋B II（N-19-25）、蓋B III（N-22~24）、蓋B IV（SB04-2. Ho-15~17）、蓋B V（N-20）とする。ただし、完形品が少なく大半は復元した数値を使用したことを付記しておく。



第31図 包含層の遺物分布図

かえりがつく蓋Aは、かえりの先端が口縁端部の下に出るものはなく、かえりを有する蓋類のなかでも終末の形態である。またHo-20は内面を指ナデされる。蓋Bは、口縁端部が嘴状となるものと、折れるものがある。折れるものには器高の低いもの蓋B II・B IIIに多い。また天井部が面をなすタイプもある(SB04-2)。調整は蓋A・Bいずれも回転ヘラ切り→回転ヘラ削りを基本とする。SD03-8は回転ヘラ削り後ヘラナデされる。

蓋Aと蓋Bの出土数(23)の比率は、12:11でほぼ同率である。蓋AではI・IVが、蓋BはIII・IVが主体的である。

坏Aは、箱形(口径と底径の差が少ない)を呈する坏A 1 (SD02-1・SD03-2)と、腰部で一度屈曲し口縁～体部が外反する坏A 2 (SD03-1・3・4)がある。

法量から坏A 1は、A 1 III (口径約14cm) SD03-2で径高(器高/口径×100)指数は34.0である。A 1 IV (口径約12cm) SD02-1で径高指数は30.50である。坏A 2は、A III (口径約14cm) SD03-1・SD03-3・SD03-4・N-15で径高指数の平均値は27.89である。A IV (口径約12cm) N-4・N-7・N-8で径高指数の平均値は29.08、A V (口径約10cm) Ho-5・N-3径高指数の平均値は32.22である。このように坏A 2はIII→IV→Vと口径の小さいものほど指数が高い。言い換えれば口径が小さく容量が深いものほど指数は高くなる。坏A 1は2点と数量が少ないが、坏A 2とは逆の結果となっている。調整は、回転ヘラ切り→無調整が大半である。そのほか坏Aでは回転ヘラ削り後に櫛状工具でナデを施すもの(SD03-3, Ho-8, N-8)もみられる(註1)。

坏Bは、高台が底部の中央よりとなり、坏A 2類と同タイプの坏B 2 (SB04-1, SD01-1, SD03-5・6)となる。井戸跡・溝跡からは出土していないが、高台から口縁～体部が直接開く坏B 1 (Ho-10)としたタイプがあり、これは坏A 1類に後続するタイプと見られる。

法量から坏B 2は、II～Vの4種に分けられる。B 2 IIは(口径約16cm) SD01-1・SD03-6・N-15で径高指数の平均値は33.03である。B 2 IIIは(口径約14cm) SD03-5・Ho-12・Ho-13で径高指数の平均値は31.00である。B 2 IVは(口径約12cm) Ho-11・N-13で径高指数の平均値は30.72である。B 2 V (口径約10cm) SB04-1・Ho-9・Ho-10・N-10・N-11・N-12で径高指数の平均値は34.04である。B 2においてはIVとIIIの数値が近似するところからIV・III→II→Vと、口径の小さいB 2 Vが径高指数がもっとも高くなる。調整は坏Aと同様回転ヘラ切り→無調整が大半であるが、Ho-13(底部が高台より出るタイプ)は回転ヘラ切り後ナデ?のようである。

以上の結果から、SD01-03出土の土師器壺は山三賀II遺跡(坂井1989-3・4)での長壺A系と長壺B系とのあり方に類似している。長壺A系はI期(第8世紀第1四半期)に主体的で、長壺B系はI期から混じるが客体的である。県下では上市町東江上遺跡(岸本1982)の土師器壺と須恵器蓋A・Bの特徴と組成が類似する。

これらからSD01-03出土の土器(土師器・須恵器)は、7世紀末～8世紀第1四半期の特徴を備える土器群と思われる。

漆付着土器

土師器と須恵器の中には、漆が付着するものが12点出土した。このうち奈良・平安時代に帰属するものは11点であり、残り1点は背磁碗である。

漆が付着するものには①断面のみに付着し、破損部を修繕するための所謂漆接ぎ(2点)と、②坏・壺の底部に付着するものが(10点)出土している

表5 漆付着土器の
器種別個体数

	器種	点数
土師器	坏壺	1
	盖	2
須恵器	坏長頸壺	5
	長頸壺	2
計		10

漆付着土器10点は土師器と須恵器に分けると3:7であり、須恵器が多いため。土師器壺はいずれも破片であるため、明確ではないが破片を利用し、須恵器壺と同様にパレットとして使用されたものと思われる。長頸壺については貯蔵用として使用されたものであろう。

出土位置はSD03周辺に多く出土することから、漆工房がこの辺りにあった蓋然性は高い。特にSB06柱穴からの出土はSB06が建てられた以前の所産であり、建物A・C群の時期とはあながち無関係ではあるまい。

土錘について

土錘は22個出土した。このうち2個は近世の陶磁器仕様であり、残りの土錘中計測可能な16個で行なった。

土錘の分類には、谷口栄氏によるすぐれた考察がある。ここでは氏による論稿「東京湾北部における漁撈活動」の分類（谷口1994）に従った。

谷口氏は孔径と重さを重視して管状土錘をI~VIIまでの7分類をされている（表6参照）。これによれば、III類は孔径0.5~1.0cm程度、長さは5cm前後、重量は20~50g。Vb類は孔径0.5~0.6cm程度、長さは3.0~4.0cm前後、重量は4~5gにまとまりがある。Vc類は孔径0.5~0.6cm程度、長さは4.0cm以上、重量は20g前後となっている。

その結果、III類は古墳時代から平安時代に至る時期に集中し、わずかながらVc・Vb類は奈良時代以降からの出現が想定されている。

その分類に従えば、本遺跡の土錘は16個の内、III類が12個、V類が4個でさらにV類はVc・Vb類に細分され、Vb類が1個、Vb類が2個であり、ほぼ同様の結果が見られる。

谷口は孔の大きさが網の太さを反映するとし、形態分類から漁網を想定され、①I・II類（孔径1.0cm以上）からは地曳網あるいは刺網程度、③IV・V・VI類は（0.5~0.6cm）投網など、②III・VII類は（孔径0.5~1.0cm以上）は①に近い網とされている。III類は当遺跡において最も多く、古墳時代からの伝統的な形態が奈良・平安時代を通じて①に近い規模の地曳網あるいは刺網などの捕獲法が踏襲されている事になる。

しかし、これは東京湾岸での結果であり、富山湾にただちに適応出来るかは今後の課題であるが、氏が指摘されるように古墳時代に「漁撈集団の組織化が図られ…（中略）…古墳群形成などの新勢力の開発手段のなかに漁撈活動も組み込まれていたと考える。」とする意見はあながち無視は出来ないであろう。さらに葛飾・江戸川区域の古代大崎郷の推定地での調査によれば、「II類の大型管状土錘は7世紀後半以降には消滅し、これ以降、漁撈から農耕へ生業活動の転換が図られた。」と考えられている（谷口1994）。

この事は律令期の新たな編成により、この漁撈集団は意図的に解体され、農耕へ生業活動の転換あるいは開墾に組み入れられた可能性がある。また松村恵司氏が述べているように奈良時代には「百万町開墾計画」「三世一身法」「永年私財法」など一連の開墾奨励策（松村1992）が打ち出され、生業活

表6 土錘計測表

番号	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
分類	III	III	Vc	Vb	III	Vc	Vc									
長さ	6.3	5.5	6.5	4.0	5.5	6.6	6.0	5.5	5.0	6.0	6.0	5.0	5.5	5.0	5.0	4.5
幅	4.0	4.0	2.5	4.0	3.7	3.7	3.0	3.0	3.0	3.3	3.5	3.0	3.0	2.5	2.0	1.8
厚さ	1.2	1.2	0.7	0.5	1.0	1.0	0.7	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.3	0.6	0.6	0.5
重さ	56.2	29.0	33.4	74.0	61.6	86.5	41.3	43.7	44.0	58.3	63.1	36.0	46.9	27.0	24.0	12.4

動の転換の背景にはこのような政策的な意図が働いている可能性が高い。

このように律令期の新たな編成は、前述の「農耕へ生業活動の転換あるいは開墾に組み入れられた」とする下総国の現象、ひるがえって越中国では「北陸型土師器長窯」の出現により、須恵器工人が土師器の生産に関与し「農業共同体内に存在した土師器工人の消滅ないし須恵器生産組織への吸収とする考え」(岸本1982)は、新たな土器生産組織・流通機構が整備された事を示すものであり、それぞれの地域で、その地域の実情に則した新たな編成がなされた事を示唆しているものと思われる。

4. おわりに

平成3～8年度にわたる調査の成果は、越中国新川郡における律令期の一側面を見る事ができた。建物跡は累計50棟を数え、その配列からは、区画溝と側柱建物と縦柱建物が織りなす官衙、あるいはそれに類するものと思われ、その企画性は非常に高い。このことからやはり官衙的性格を有する遺跡としての位置付けは色濃いものがある。

平成3～5年度の調査では掘立柱建物が44棟検出され、その構造別の比率は側柱建物：縦柱建物が30：14と側柱建物が圧倒的である。なかでも注目すべきは、前年度調査のSD01である。当初、このSD01は平成8年度調査においてSD03に連続するものと推定された。SD01は幅約7m前後の溝跡である。現況はL字状を呈して北西に直進し、そのL字状の南西隅から少なくとも約80mの距離はある。さらにSD03に連続して画すれば、約方1町の区画溝が想定され、それは院を形成することになる。

その区画溝は、内包する縦柱建物群と共に倉庫院としての性格を推定したが、図面上での連続性はわずかにズレを来し微妙な結果となった。しかし周囲にはSD01と同方向で幅5m前後の溝が他にない事から連続する可能性はわずかながら残る。(第32図)

いずれにしても、SD01とSD03の連続性については、水橋荒町遺跡の性格を大きく左右するといつても過言ではなかろう(註3)。

今後の調査の課題としては、少なくとも①SD01とSD03は同一であるかの再確認。②同一でないにしろSD01の北側あるいは南側の走行の追求、つまり北・東の両側の展開、これら①②が鍵となろう。

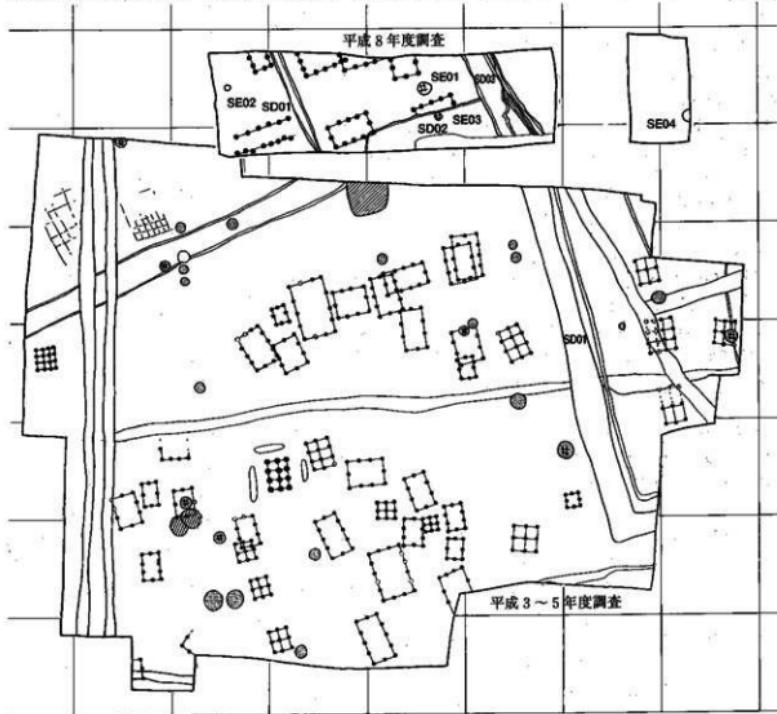
井戸は、累計24基は多少の時期差を考慮しても多い。なかには建物群に付属するであろうが、仮に側柱建物が低床倉庫であったとしても、倉庫群に対して数多くの井戸は不必要であり、やはりこの場合、側柱建物は倉庫以外の性格と思われる。さらにSE03のような横板井籠組の井戸枠は官衙的とする意見もあり(宇野1982)、これにしたがえばますます官衙的な性格に近い。また、「水橋の歴史」(小林1997)によれば、前年度にも漆のパレットが多数出土しており、周辺には漆に関わる工房があった蓋然性は高い。このなかでも平成8年度遣構A群付近で漆パレットが多数出土し、遣構A群は、「建物+井戸+漆」から7世紀第4四半期～8世紀第1四半期に造営された漆工房に関わる遣構群と思われる。

古代道路の視点からは、金坂清則氏により「陸路が海運に連結する河川交通+内陸水路網」ネットワークが指摘されている(金坂1996)。金坂氏は前述のネットワークの存在を若狭国の例をもって実証され(註4)、「北陸道諸国における水運と官道との繋がり」があつたことを強調されておられる。金坂氏はこのなかで水橋駅についても触れられており、平成3～5年の調査の成果(註5)を受けて、從来の推定地である水橋駅は白岩川右岸ではなく、辻ヶ堂の水橋荒町遺跡を比定する有力な根拠とさ

れるなど、官衙的（駅館）な性格として指摘されている（金坂1996）。

これら的事より、総括すると以下の6点が指摘される。

- ①建物跡と溝跡は、その方向と配列において企画性が高く、その間は完数尺となる。
 - ②建物跡は、漆工房の蓋然性が高く、その時期は7世紀第4四半期～8世紀第1四半期の律令期編成の時期にある。
 - ③斎串からは、水辺祭祀（井戸祭祀）が行なわれていた。
 - ④前年度SD01と平成8年度SD03との連続性については、微妙に問題を残したが、おそらく約方1町に亘る溝構が想定され、総柱建物群とあわせて倉庫院（註6）として推定される。
 - ⑤この倉庫院内の総柱建物群は、常願寺川水系における「陸路が海運に連結する河川交通+内陸水路網」ネットワーク（金坂1996）による荷を取納する倉庫群と推定される。
 - ⑥遺跡の立地からは、富山湾と常願寺川に面し、津を兼ね備えた交通網が推定される（註7）。
- これらの指摘した事からは、古代における水橋駅と断定するには決して十分ではないものの、その蓋然性は高い。今後の調査により、北・東側の展開と木簡・墨書などの文字資料に期待したい。
- 本報告は平成8年度分の報告であり、平成3～5年度調査における建物などの企画性については新たに報告がなされるはずである。その結果、本報告での建物の企画性については変更もあり得る。



第32図 水橋荒町遺跡造構跡図（平成3～5年・8年度） S=1/1,000

註・参考文献

- 註1) ナデについては器面を平滑に仕上げ、調整の最終段階であると認識している。ここで疑問とするSD03-3、包含層-8、西排土-8の各底部の痕跡を棒状工具でのナデとしたが、先の認識からすれば、この中でも西排土-8例は回転ヘラ切り後に平滑に仕上げたと見てよい。
- 註2) 井戸の規模と構造については、井上和人氏による平城宮と平城宮内での検討がなされている。それによれば、平城宮内では一辺150cm以上の大型井戸枠が多く、小さいものでも90cmを下回るものはなく、平城宮内では一辺60~80cmが最も多く、120cmを越える大型の井戸枠は高位の貴族、官人など、いずれも1町以上の宅地を占有する限られた階級の住人である。
- また、構造からは平城宮内の120cm以上の井戸枠は例外なく横組みであり、60~100cmのそれは大半が縱板組で、後者が一般的なつくり方であった事がわかる。
- このように本遺跡の井戸枠は、60~80cm内である事から一般的な規模とされるが、構造からは階級差として見てとれる2種のつくり方がみられた。こうしたなかでのつくり方の違いは、中央から離れた一方でのあり方として注目したい。
- 註3) 現在駅館の全貌のわかる遺跡としては、兵庫県小豆丸遺跡(布施駅家)と同県落合遺跡(野原遺跡)がある。両遺跡は山陽道に面する遺跡で、建物の配列はいずれも企画性が高く、政庁と脇殿から構成されている。さらに「コの字形」配列の建物群はいずれも築地あるいは横列(縦)で院をなす。このように主要な建物域は仕様の違いはあれ院を形成する。それは地域によっては溝であっても問題はなからう。
- 註4) 越前国では朝津駅(浅水川)、三尾駅(竹田川)、松原駅(教賀津)、阿味駅(文室川)、国府と旧丹生郡家(日野川)、新丹生郡家と草団(吉野瀬川)、今立郡家(鞍谷川)などが開通し、海路については三国濱・教賀津・大丹生の泊、からふきのわたり・水津の渡しがある。
- 註5) 「埋文とやま」44、「水橋荒町遺跡」平成3年度 富山県埋蔵文化財センター年報
- 註6) 註3と同じ
- 註7) 鈍足になるが古代の北陸あるいは日本海沿岸には、このようなネットワークが隨所に設置され、津・渴と駅を兼ね備えた交通網を必要としたのではなからうか。それはまさに季節により冬は水運、夏は陸運に頼らざるを得なかった日本海沿岸の事情に即した交通網といえよう。
- (井上1989) 井上和人 第III章2F小結「井戸の規模と構造について」1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
- (小林1997) 小林高範 「水橋荒町遺跡の調査に携わって」1997『水橋の歴史』第4集
- (中山1994) 山中敏史 「古代地方官衙の遺跡の研究」1994「正倉の建物配置には建物間の距離を10尺単位などの完数尺や、桁行・梁行の長さを基準とした寸法が見られる例があり、高度な配置計画にしたがって造営された事を示す場合があり、そうした例には関和久遺跡・日秀遺跡・小郡遺跡などがある。」
- (坂井1989-3) 坂井秀弥 「北陸型土器師長甕の製作技法」1989『新潟考古学談話会会報』第3号新潟考古学談話会
- (坂井1989-4) 坂井秀弥 「山三賀II遺跡からみた阿賀北地方の古代土器」1989『新潟考古学談話会会報』第4号新潟考古学談話会
- (宇野1982) 宇野隆夫 「井戸考」「史林」第65巻第5号
- (宇野1989) 宇野隆夫他 「越中上末麻」1989富山大学人文学部考古学研究室 富山大学考古学研究報告第3番
- (岸本1982) 岸本雅敏 「畠東江上遺跡・まとめ」1982『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編一』上市町教育委員会
- (谷口1995) 谷口 栄 「東京湾北部における漁撈活動」「王朝の考古学一大川清博士古稀記念論文集一」大川清博士古稀記念会編 1995
- (谷口1994) 谷口 栄 「大崎郷の復元と住人の生業活動」「古代王権と交流二 古代東国の民衆と社会」名著出版 1994
- (松村1992) 松村恵司 「古代の村を掘る」「古代を発掘する」六興出版 1992
- (金坂1996) 金坂清則 「北陸道—その計画性および水運との結びつきー」木下 良編「古代を考える 古代道路」1996吉川弘文館

写 真 図 版



1. 水橋荒町遺跡遠景（東より）上方は常願寺川と富山湾



2. 調査区全景（空撮：北より）

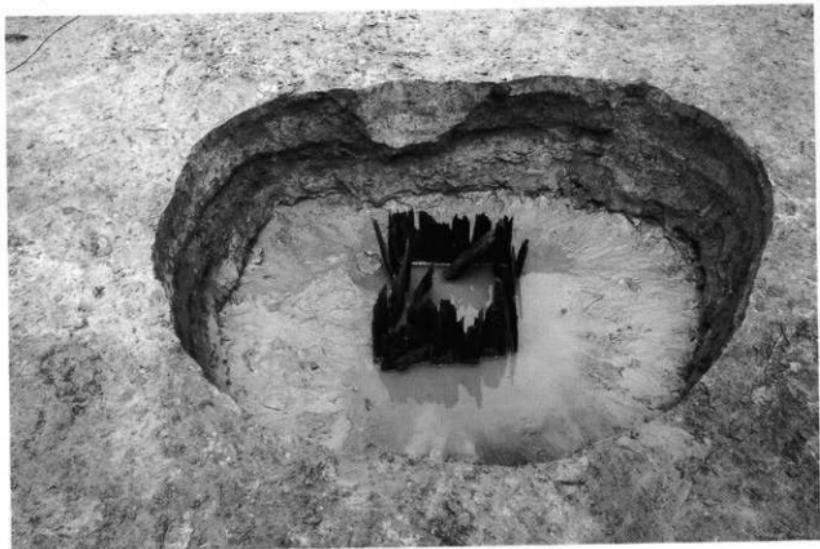
図版 2



1. 東調査区全景（空撮）



2. 西調査区掘立柱建物群（南西より）



1. SE01井戸枠状況（南より）

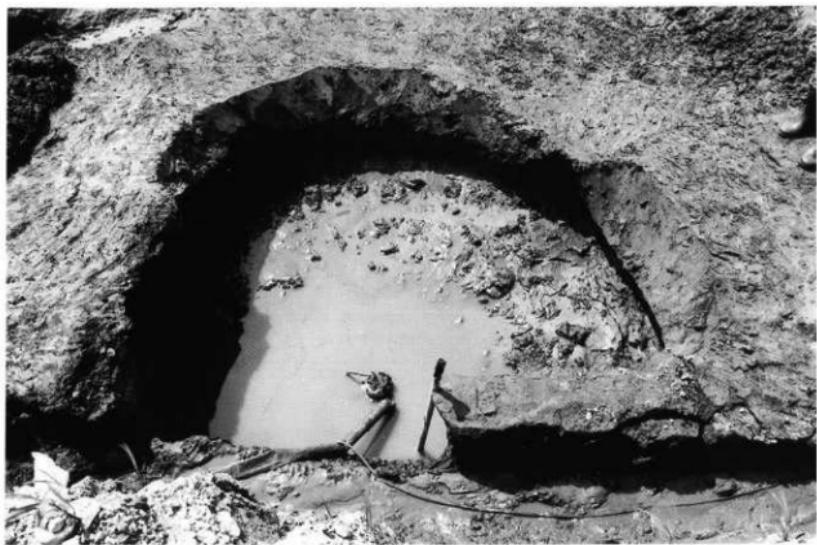


2. SE02完掘状況（南より）

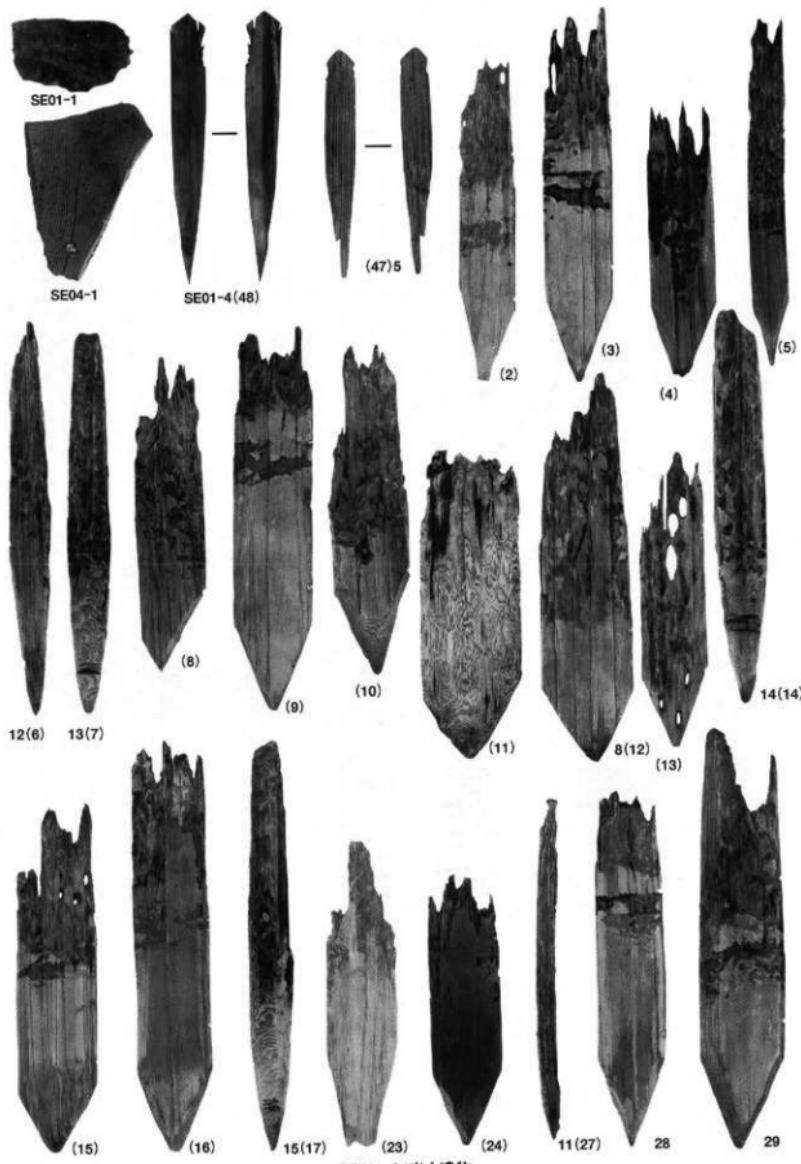
図版 4



1. SE03井戸枠（1段）状況（南より）

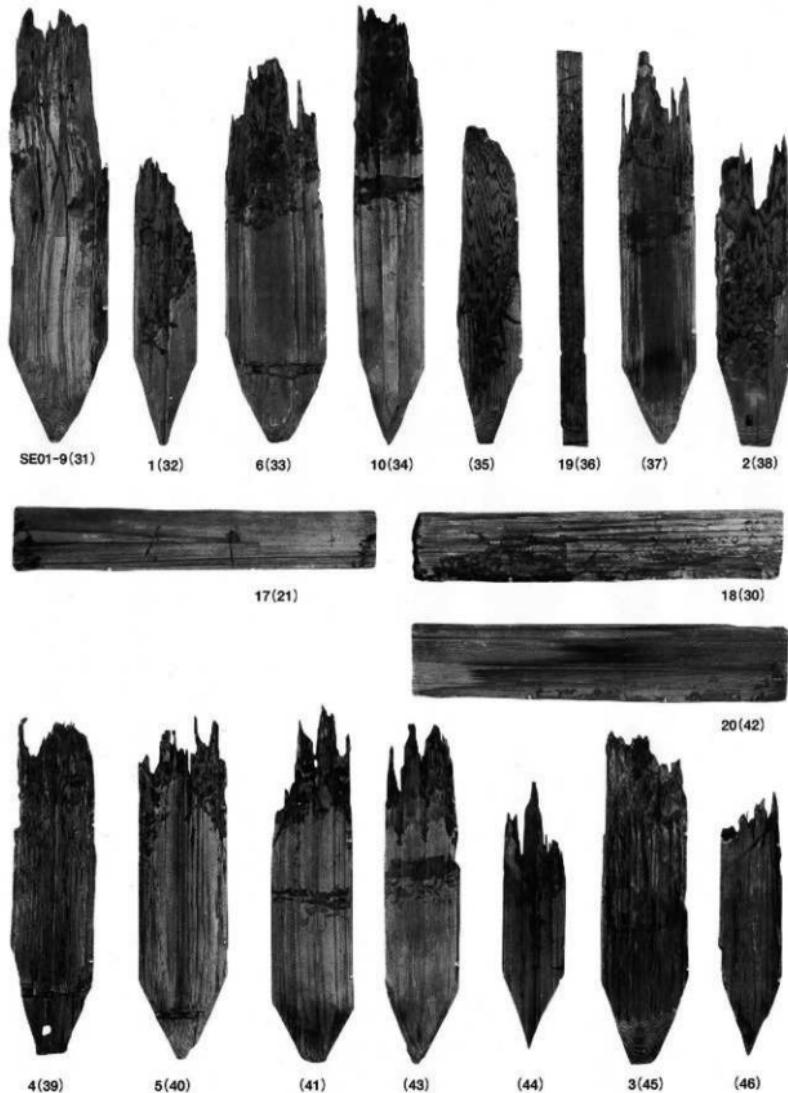


2. SE04完掘状況（東より）

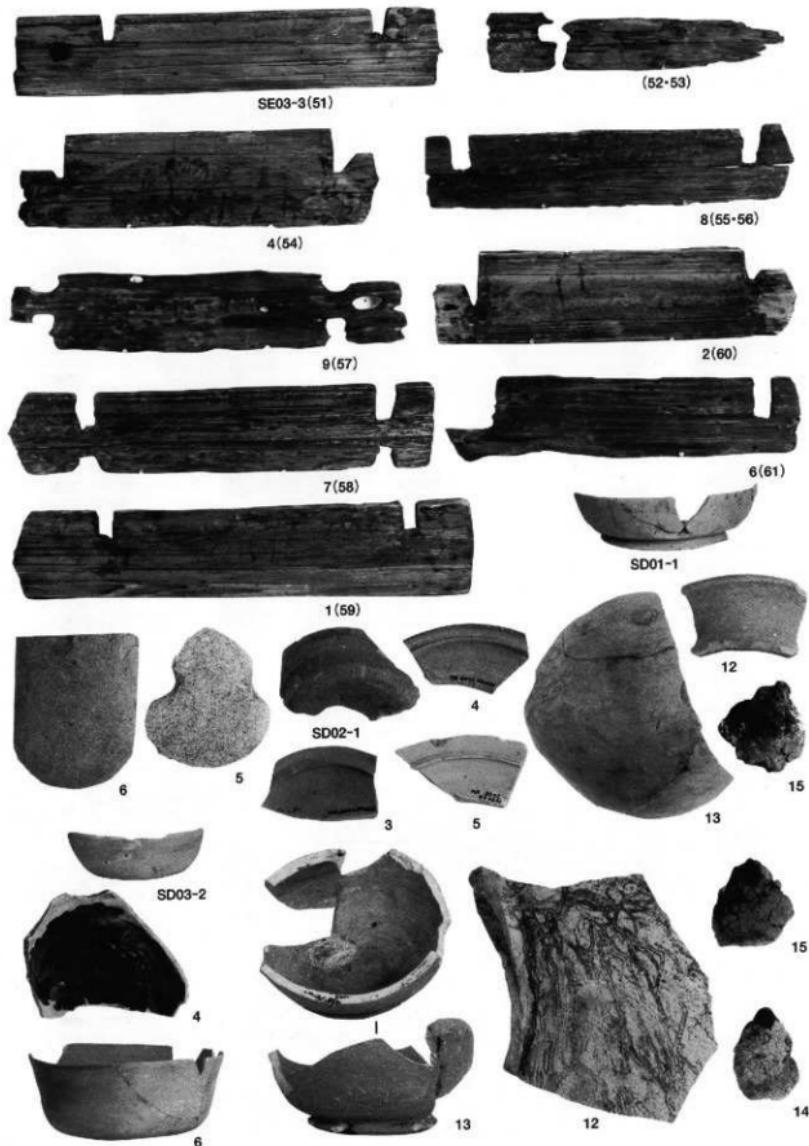


SE01・04出土遺物

图版 6

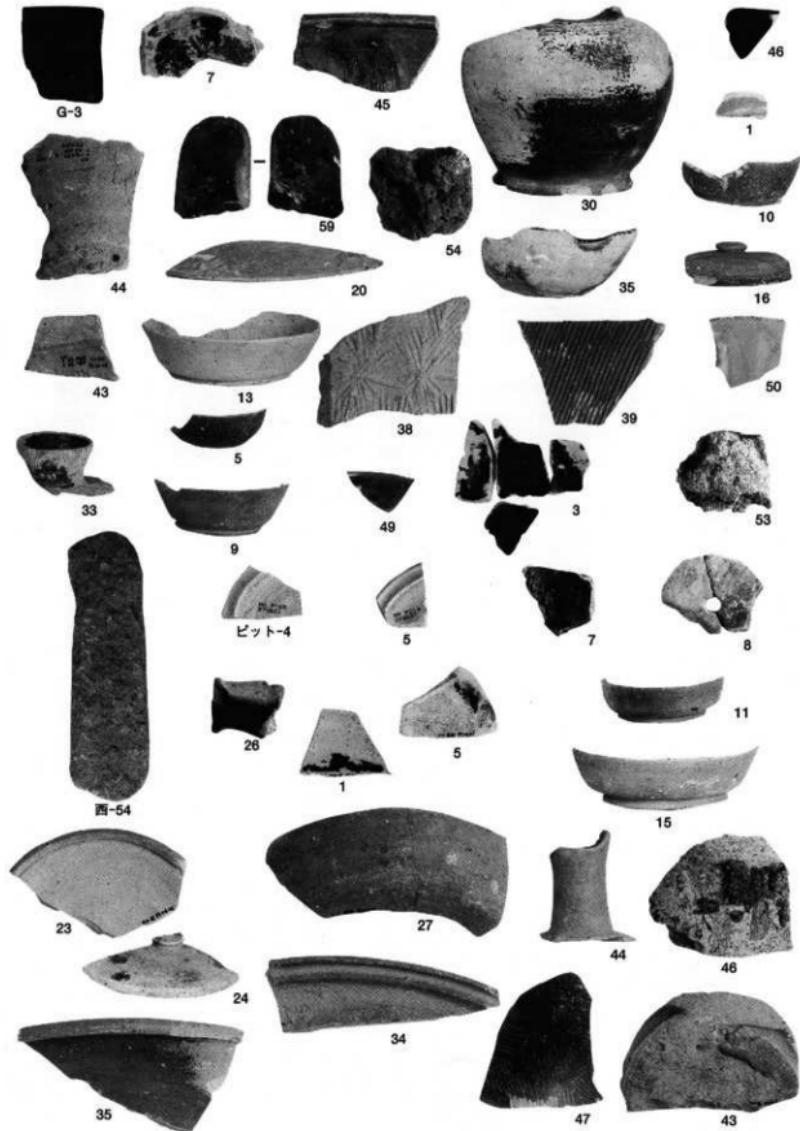


SE01出土遗物



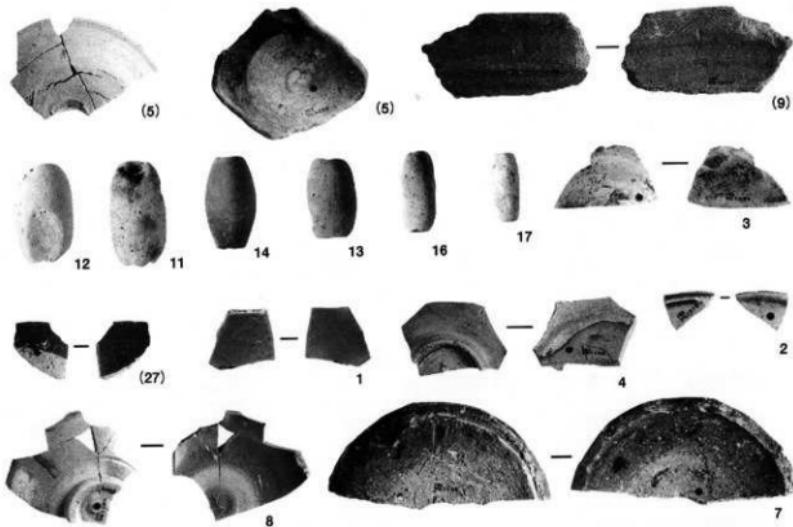
SE03・SD01~03出土遺物

圖版 8

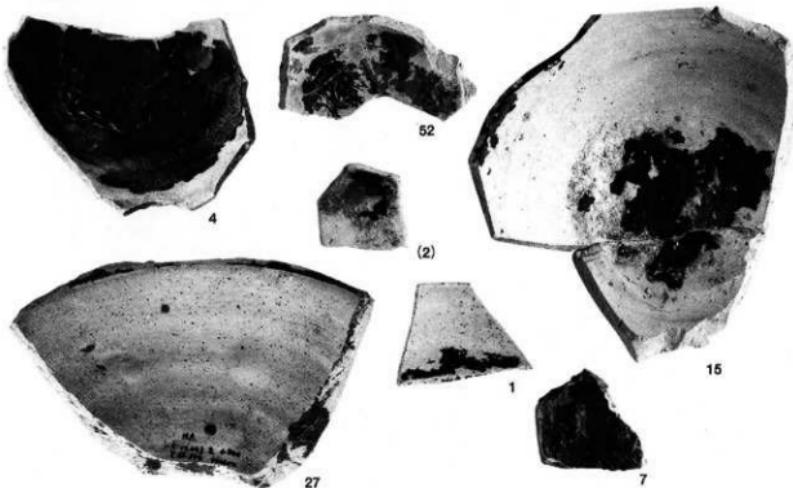


包含層・ピット・排土置き場出土遺物

図版 9



表掲遺物



※()は台帳番号

漆織ぎ・漆パレット

抄 錄

フリガナ	ミズハシアラマチイセキハックツチョウサガイヨウ ニ							
書名	水橋荒町遺跡発掘調査概要 II							
編著者名	小林高範 小村正之 松田政基							
編集機関	山武考古学研究所 T286-0045 千葉県成田市並木町221 TEL 0476(24)0536(代)							
発行機関	富山市教育委員会 T930-0815 富山県富山市新桜町7番38号 TEL 0764(31)6111(代)							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミズハシアラマチイセキ 水橋荒町遺跡	富山県富山市辻ヶ塙地内	16201	044	36° 44' 43"	137° 17' 33"	1996.1.11 ~1997.7.25	1,954	公共事業に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
水橋荒町遺跡		縄文時代 弥生～古墳時代 奈良・平安時代	掘立柱建物跡 井戸跡 橋列跡 溝跡 土坑	6棟 4基 2条 7条 4基	浅鉢・深鉢・打製石斧 高坏・扁平片刃石斧 須恵器 坏A・坏B・蓋・盤B ・短頸壺・長頸壺・平 腹・双耳瓶・横瓶・甕 土師器 赤彩陶・黒色陶・甕 土製品 紡錘車・羽口・土鉢 木器 着串・井戸枠 青磁・蓮華文椀 瀬戸焼 折線皿・天目茶碗 珠洲焼 摺り鉢・甕 越中瀬戸皿・建水 肥前系 青絞釉皿	主体となる掘立柱建物は、溝 に開まれた外法39m(130尺) 内に、同じ方向建物が配され ている。これら遺構間の距離 は、完数尺が多い事から極めて 高い計画性に基づいている 事が理解される。 遺物年代は7世紀第4四半期 ～8世紀第1四半期が主的 である。 平成3～5年度の調査では、 今回を上回る掘立柱建物・溝 ・井戸が検出され、官衙的性 格を持つ遺跡としてすでに、 指摘されている。		
		中世						
		近世						

富山市水橋荒町遺跡発掘調査概要Ⅱ

印刷 1999年3月25日

発行 1999年3月31日

編集 山武考古学研究所

発行 富山市教育委員会
富山市埋蔵文化財調査委員会

印刷 株式会社文化総合企画
千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12
0476-93-0593